

やはり俺たちの青春ラブコメはまちがっていた。

神納 一哉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作を11巻まで読み終わって、その後の展開を妄想してみたくなりました。

実際はこんな展開にならないと思います。

4月18日 本編完結

目次

独自設定まとめ	1
やはり俺たちの青春ラブコメはまちがっていた。	
1 なんだかんだで、奉仕部での日常(?)が始まる。	3
2 そして比企谷八幡は、ひとり夜に含羞する。	8
3 少しずつ確実に、本物と幻の境界線が浮かび上がる。	11
4 晴れ渡る空、見つめる先。それぞれの想いが交錯する。	
16	
5 そして、比企谷八幡は行動を開始する。	20
6 こうして、雪ノ下雪乃は大義名分を手に入れる。	24
7 そして、俺たちは束の間の安らぎに身を委ねる。	28
8 されど確実に、比企谷八幡は歩を進める。	32
9 やはり由比ヶ浜結衣は優しい女の子である。①	36
10 やはり由比ヶ浜結衣は優しい女の子である。②	40
11 この期に及んで、比企谷八幡は踏み込むことを躊躇う。	
44	
12 やはり俺たちの青春ラブコメはまちがっていた。	48
エピソード①	52
エピソード②	56
エピソード③	60
エピソード④	63
エピソード⑤	67
ぼーなすとらつくー!	
B・T・1 それぞれの誕生日	72

B.	B.	B.	B.	B.
T.	T.	T.	T.	T.
2	2	2	2	2
雪ノ下 雪乃は愛を知る⑤	雪ノ下 雪乃は愛を知る④	雪ノ下 雪乃は愛を知る③	雪ノ下 雪乃は愛を知る②	雪ノ下 雪乃は愛を知る①
95	90	86	82	77

独自設定まとめ

雪ノ下父の名前は雪ノ下利晃としあき

雪ノ下母の名前は雪ノ下陽菜はるな

雪ノ下陽菜の実家は二階堂家で、他の家族はもう他界している。

雪乃の留学先のホストファミリーは雪ノ下陽菜の友人であるキャサリン女史の家。旦那の名前はアビー。

留学先はイギリスのウエストミンスターにある女学院。キャサリン女史もそこを卒業している。

国際教養科に入ったのはイギリスで受験したためということにしておく（日本は4月、イギリスは9月と新学期が違うので、小学校卒業後はステイ先で8月まで英語の勉強をしていたとうことで辻褄を合わせたい）

雪乃が紅茶を嗜むのは留学時の名残。スコーンやショートブレッドも作れる。

雪乃の生みの親は鶴岡雪菜ゆきな。父親は鶴岡俊樹としき。

鶴岡雪菜は雪ノ下陽菜の妹。旧姓は二階堂雪菜。

鶴岡夫妻は17年前の1月3日に交通事故で雪乃を残して亡くなっている。雪乃の誕生日が両親の命日。

鶴岡夫妻の墓は雪ノ下家の墓の側にあるが、雪乃が伴侶を見つけるまでは秘匿しておくことに雪ノ下夫妻が決めた。

雪乃は特別養子縁組で雪ノ下家の次女として登録されているので戸籍上は雪ノ下利晃・陽菜夫妻の実子。

鶴岡家（雪乃の両親）の存在は「B. T. 2 雪ノ下雪乃は愛を知る」内で伝えられるまでは雪ノ下夫妻と数名の使用人しか知らない。「B. T. 2 雪ノ下雪乃は愛を知る」内で八幡、雪乃、陽乃が存在を知ることになる。

雪乃が住んでいるマンションは鶴岡夫妻が住んでいた家で、雪乃に相続されている。雪乃が高校生になって入居する際に雪ノ下建設で全面リフォームしている。

雪ノ下陽乃はシスコン。しかし雪乃が反抗するのが可愛くてつい

構い過ぎてしまう。そして雪乃に嫌われると母親に泣きつくというママっ子でもある。大学で嫌なことがあっても母親に泣きついていく。

母親が厳しいと雪乃に吹き込んでいるが、自分が母親に甘えるのを独占するためだったりする。

母親が雪ノ下家の実権を握っていて夫は傀儡で婿養子というイメージを植え付けたのは、母親が陽乃より上の存在ということを雪乃に刷り込むため。

大学の専攻は政経。ゆくゆくは父親の後を継いで政治家になることを目標としている。

雪ノ下陽菜は二人の娘を何よりも大切に思っているが、雪乃に対しては業務的な対応をしてしまいがちだったため、一歩引いたところから見守る感じになっている。

陽乃が泣きついてきたときは、一緒に風呂に入ったり、一緒に寝たりなど、結構甘やかしている。

雪乃も甘えてくれればいいのにと思っているが、陽乃の策略で遠ざけられているため、その願いは叶わないかもしれない。

やはり俺たちの青春ラブコメはまちがっていた。

1 なんだかんだで、奉仕部での日常(?)が始まる。

月曜日の放課後、俺はいつものように部室の中で雪ノ下の入れた紅茶を飲み、由比ヶ浜が用意したお茶受けのお菓子(市販品。これ重要)をつまみながら文庫本を眺めていた。

雪ノ下は文庫本に視線を落とし、由比ヶ浜はデコトラみたいにキラキラした携帯を弄っている。

いつもの光景のはずなのに、なんていうか、その、空気が違う。

原因はわかっている。うん。わかっているんだけど…。

「…比企谷くん。おかわりは?」

「あ、うん。もらおうかな」

「わかったわ。ちよつと待ってね」

そう言っつて雪ノ下は俺の湯のみに紅茶を注ぐと、湯のみを自分の口元へと持っていく。

「ふーふー、ふーふー」

「雪ノ下? お前、何やってんの?」

「比企谷くんが猫舌だから、紅茶を冷ましてるのだけれど」

雪ノ下は少しだけ首を傾げてそう言っていると、再び湯のみの中に息を吹きかける。

え? なんなのこれ。恋人なの? いや、かわいいのんですね。

「ヒッキー」

「な、なんだ?」

「はい、あーん」

「はあ!？」

由比ヶ浜がクッキーを手に、満面の笑顔でそんなことを言ってくる。

「ほら、あーん」

「いや、置いといてくれれば普通に摘むから」

「ヒッキー両手ふさがってるじゃん。だから、あーん」

いやいや、それっておかしいよね？なんなの？看病なの？俺、どこも悪くないんだけど。

「今はいらないから。それは由比ヶ浜が食べてくれ」

「むー。ヒッキーの意地悪」

由比ヶ浜はぷくつと頬を膨らませると、手に持っていたクッキーを机の上の皿の中に戻す。

……どうしてこうなった。

再び携帯を弄りだした由比ヶ浜から、湯のみの中に息を吹きかけている雪ノ下へと視線を移し、俺は二人に聞かれないように小さくため息をついた。

× × ×

夕陽に染まる空と雲を背に、雪ノ下が意を決したかのように口を開く。

「私の依頼は、比企谷くんと同じよ。∴私は本物が欲しい。私の中の本物を見つけて欲しい」

その言葉を聞いた瞬間、俺は雪ノ下から目を離すことができなくなった。雪ノ下は澄んだ瞳で真っ直ぐに俺を見つめている。

「∴だと思った。それじゃあ、みんな同じだね」

「由比ヶ浜さん。ええ、そうね」

「ゆきのんも、∴勝ったら全部貰うんでしょ？」

「そうね。そうなるわね。∴私も、卑怯ね」

由比ヶ浜の問いに、雪ノ下はそつと俺から視線を逸らし、瞳を閉じて呟いた。雪ノ下の呟きを聞いた由比ヶ浜は、暖かな微笑みを浮かべたまま小さく頷いている。それは二人にしかわからないものがあることを感じさせた。

「∴由比ヶ浜さん、さつき比企谷くんに渡したもの。本当にただのお礼ということでもいいのかしら？」

「∴……うん、そうだよ」

「∴……そう」

雪ノ下は少し逡巡してから、鞆の中に右手を差し込み、それから俺の方を見て、右手に縦長の紙袋の取っ手を掴んで俺の方に差し出し

た。

「比企谷くん。……これ、貰ってくれる?」

「お、おう」

「依頼とは関係ないものだから。そうね、世間一般で言う今日限定のものよ」

それにどのような思いが込められているのか明言はせず、雪ノ下は小さく微笑んだ。

「それで、私も由比ヶ浜さんも、勝ったら全部貰うことにしているんだけど、比企谷くんはどうするのかしら?」

「俺は……」

言いかけて言葉に詰まる。雪ノ下と由比ヶ浜が言う『勝ち』とは何を意味しているのか、『みんな』とは何を表しているのかが不明瞭だ。……いや、違う。俺はこの俺たちの関係の違和感から目を背けてきた。

由比ヶ浜は今日、デートしようと呼び出し、お礼としてクッキーをくれた。そして勝負に勝ったら全てを貰うと宣言した。

雪ノ下は自分の中の本物を見つけてほしいという依頼をして、バレンタイン限定のものをくれた。そして由比ヶ浜と同じように勝負に勝ったら全てを貰うと宣言した。

二人が求めるものは、相容れないものだ。決して混ざり合うことのできないもの。どちらかは傷つき、お互いの関係も否応なしに変わっていくだろう。

「俺は、奉仕部が、今の関係が、いいと思っている。雪ノ下が居て、由比ヶ浜が居て、俺が居る。そんな関係を壊したくない、そう思っている」

声が震える。だが言わなくてはいけない。

「でも、この関係のままでは駄目だっていうのも、わかってはいる」
雪ノ下も由比ヶ浜も真っ直ぐに俺を見ている。俺は視線を合わせることができなかった。

「……1か月、時間をくれないか?」

「…バレンタインデーの返事はホワイトデーに。ということかしら

「？」

「理由付けとしてはそれでもいい。お互い考える時間も必要だと思うし」

「じゃあそれまでは今まで通りってこと？」

「そうしてくれると助かる」

雪ノ下と由比ヶ浜はお互いを見て小さく頷く。

「では、そうしましょう」

「そうだね」

「悪いな」

「でも、完全に元通りというのは無理よ。わかるわよね？」

「ああ」

「じゃあ、その、ひとつお願いがあるのだけれど」

「なんだ？」

「比企谷くん。私と連絡先を交換してくれるかしら？」

「ああ：つと、これだ、登録してくれ」

俺は携帯を取り出してメールアドレスを表示させて雪ノ下に差し出した。雪ノ下は少し驚いたような表情を浮かべ、自分の携帯を操作し始める。

「無防備ね」

「見られて困るもんないからな」

「電話番号は？」

「ほら」

「登録完了。確認で電話をかけるわね。あと、空メールも送るわ。比企谷くんはそれを登録して」

「了解」

その場で見慣れない番号からの着信とメールを確認して、それらを雪ノ下雪乃として携帯に登録する。

「：由比ヶ浜さん。これから一か月は、私たちから誘うのは無しにし
ましよう」

「うん、そうだね」

雪ノ下と由比ヶ浜はそう言葉を交わす。

「さて、じゃあ帰ろっか」

「そうしましょう」

「おう」

夕陽を背に、誰からともなく駅に向かって歩き出す。

こうして俺たちは、期間限定ではあるものの日常を取り戻したのである。

2 そして比企谷八幡は、ひとり夜に含羞する。

……眠れない。

明日は日曜日で休みだし、予定もないから別に構わないんだけど。ただ、こうやって目を閉じていると、夕方の出来事が思い起こされてきて、なんだか背中がむず痒くなってくる。

何だよ、『1か月、時間をくれないか?』って!何言っちゃってるの!?俺!

一度言ってしまったことを無かったことには出来ないし、時間を戻すことも出来ない。

雪ノ下と由比ヶ浜、二人のことを思い浮かべ、布団の中で頭を抱える。

あの二人と奉仕部の部室で過ごす時間は、いつの間にか俺の中でかげがえのないものになっていた。

雪ノ下が淹れた紅茶を飲み、文庫本を読みながら雪ノ下と由比ヶ浜のじやれ合いを眺めたり、雪ノ下に咎められたり、由比ヶ浜に『キモい』と言われたり…。

あれ、なんか涙が出てきた。

……冗談はさておき、問題は制限時間を設けたのが他の誰でもない、俺自身ということだ。

雪ノ下と由比ヶ浜と俺。三人きりの部活仲間。

雪ノ下雪乃。才色兼備、文武両道の奉仕部部长。学校内では完璧超人で誰からも一目置かれている存在だが、実は方向音痴で、体力がなくて、そのくせ負けず嫌いである。パンダのパンさんと猫が好き。犬は苦手。

由比ヶ浜結衣。お馬鹿の子だけど天真爛漫で人懐こい性格は誰からも好かれる存在だろう。クラスでもトップカーストの一員であるが、見た目がビッチなのはいただけでない。犬が好きで料理が苦手。

そんな二人に俺が『1か月、時間をくれないか?』とか、何言っちゃってんの俺!!

——それで、私も由比ヶ浜さんも、勝ったら全部貰うことにしてい

るんだけれども、比企谷くんはどうするのかしら？

雪ノ下の言葉が頭をよぎる。

雪ノ下も由比ヶ浜も、『勝ったら全部貰う』と言った。この『勝ち』とは、奉仕部の活動を通して誰が一番多くの人を導けるかを競い、一番多くの人を導いた者が勝者となり、勝者は敗者になんでも一つ命令をすることができる。このルールでの勝者を指しているのだろう。

だがこのルールには共闘も可という抜け道がある。そして今までの奉仕部への依頼を振り返り、今日の雪ノ下の依頼が最後と考えると、俺と雪ノ下の依頼を除いて共闘も含めて雪ノ下6勝(由比ヶ浜、戸塚、川崎、葉山、鶴見、相模)、由比ヶ浜2勝(葉山、鶴見)、俺8勝(由比ヶ浜、戸塚、川崎、葉山、鶴見、相模、海老名、一色)という勝利数が予測できる。

俺が悪役になって解決したことを加味すると必ずしも数字通りではないと思うが。

それでも、残ってる依頼の性質を考えると、勝負に勝つのは俺が選んだ方になるのは間違いない。

俺が選ぶとか、何考えてんだ俺！…でも、そういうことなんだよな。

二人の言う『勝ち』は、本当は奉仕部の勝負じゃなくて、俺に選ばれること。

『全部貰う』というのは、俺との関係が変わっても、二人の友人関係はそのまま、奉仕部の活動も変わらないようにするということ。

最後の依頼と言ったけど、あれは今の奉仕部にとって最後の依頼ということなのだろう。

雪ノ下も由比ヶ浜も『自分は卑怯だ』と言っていた。

でも、それって普通だと思う。そんなこと言ったら俺だって卑怯だ。

——俺は、奉仕部が、今の関係が、いいと思っている。雪ノ下が居て、由比ヶ浜が居て、俺が居る。そんな関係を壊したくない、そう思っている。

思うのは自由ですよ！いやだって本当に奉仕部での時間って心地いいんだもの。守りたい、あの時間。

——俺は、本物が、欲しい。

ぎやあああああああああつっ!!もうやめて、八幡のライフはゼロよ!!

何思い出してるんだよ!俺、何思い出してるんだよおおおお!!
悶えたくなるのを懸命に堪え、俺は布団の中で膝を抱えて丸くなつた。

——私は本物が欲しい。私の中の本物を見つけて欲しい。

雪ノ下の言葉を思い返し、自分の心の平穏を取り戻そうと努力する。悪いな雪ノ下、これでお前も立派な黒歴史ホルダーだ。

とりあえず、1か月の猶予がある。そんなに悠長なことは言っていられないと思うが、ある程度の時間があるのは正直ありがたかった。

雪ノ下も由比ヶ浜も、自分の中で答えを出したのだ。

だから俺も答えを出さなくてはいけない。

素直な気持ちで——。

3 少しづつ確実に、本物と幻の境界線が浮かび上がる。

今日も雪ノ下は、気が付くと俺の湯のみを手にとって、湯のみに息を吹きかけていた。

「ふうふう、ふうふう」

気にしないように文庫本に視線落とすと、由比ヶ浜がにこやかに微笑んで俺に向かって何かを差し出してくる。

「ヒツキー、あーん」

「お、おう…」

今回、スルーするのは無理でした。それなのでバスケットの手前側を啜え、自分の方へと引つ張るようにして由比ヶ浜の手が離れたのを確認してから一気に咀嚼する。

「雪ノ下、紅茶、貰えるか?」

「ええ、どうぞ」

雪ノ下は穏やかな笑顔を浮かべて、先ほどまで中に息を吹きかけていた湯のみを俺の前に置いた。由比ヶ浜は優しい笑顔を浮かべてそれを見守っている。そんな穏やかな部屋の空気をかき乱すかのように、乱暴に部室の扉が開け放たれた。

「ゆ、雪ノ下先輩と結衣先輩が先輩にご奉仕しているっ!?!」

「っーか、ヒキオ調子乗りすぎじゃね?」

「まさかの王道!?!これは雪ノ下さんと結衣TS不可避!?!愚腐腐腐腐」

「海老名は擬態しろし!」

「…………馬鹿みたい」

「あら、お邪魔しちゃったかしらー」

雪ノ下の顔から笑みが消え、何事もなかったかのように席に座る。由比ヶ浜はわたわたと両手を動かすよくわからない動きをしていた。

小さく咳払いをして、雪ノ下が事務的に声をかける。

「皆さん奉仕部に何かご用ですか?」

「あ、はい。生徒会としてお料理イベントの成功報告と、先輩方へのお

礼をしに来たわけなんですけど、イベントに参加していただいた皆さんもお礼がしたいということでしたので一緒に来ちゃいました！」
そう言ってから一色は後ろを振り返り、他のメンバーに目配せをする。

「…まー、上手く作れたからさ、その、ありがとね。雪ノ下さん」

「どういたしまして」

「優美子からのお礼ってレアだよゆきのん！」

「うっさい！結衣は黙ってるし！」

「あはは。わたしもいい勉強になったから。ありがとね。それでヒキタニ君、戸塚君に友チョコはあげたの？ハチトツ、キマシタワー！！」

「だから海老名は擬態しろし！」

平常運転で倒れた海老名さんの鼻を拭く三浦を横目に、サキサキと川崎沙希がなぜか俺に視線を向けて口を開く。

「京華が比企谷に『はーちゃん、また遊ぼうね』って伝えてくれて」

「お、おう。機会があればな」

「さすがはロリ谷君^{がや}ね。川崎さん、その男と京華さんを二人きりにしちゃ駄目よ」

「おい、なんだその嫌なあだ名は！」

「あら、ロリコンでシスコンの貴方に相応しいと思うのだけれど」

「ヒツキーキモい！」

「キモい言うな。あと、俺は断じてロリコンじゃねえ！」

「シスコンは否定しないんだ」

小町は天使だからな！仕方ないね！

「比企谷くんはシスコンなんだねー。じゃあ陽さんの妹っていう属性を持つている雪ノ下さんが有利かなー」

めぐり先輩がいつものほわほわとした口調で、反応に困ることを言いやがった。あれ？おかしいな。めぐり先輩ってそんな人だったっけ？

「まあ、確かに妹よね…」

雪ノ下が上目遣いで俺を見てそんなことを呟く。何そのあざとさ。

一色が習ったの？

「あたしは一人っ子だし…。ゆきのんずるい！」

「そんなこと言われても…」

「先輩、わたし年下ですよー。ほらほら妹みたいなものでしょう？あ、だからといって口説こうとしないてください無理ですごめんさい」

「うん。相変わらずあざといなお前」

一色が勝手に自己アピールをして、勝手に俺の考えを想像して、にべもなく断るといったいつものやり取りを終わらせる。うん、一色は今日も平常運転だな。

「つーか、ヒキオもてるし、あんたも加わらなくていいの？」

「あたしは別に、そういうんじゃない…。雪ノ下にお礼言いに来ただけだし」

「ふーん。ま、あーしは結衣を応援するし」

「…勝手にすれば」

川崎と三浦がぼそぼそと何かを話している。この前みたいに険悪な雰囲気じゃないから気にしないでおこう。触らぬ神に祟りなし。

「いやー、比企谷くんって、罪な男だねー」

気が付くとめぐり先輩が俺の横に立っていて、そんなことを小さな声で訪ねてきた。

「…何ですかいきなり」

「いろんな女の子から好意を持たれているでしょう」

「…まったく、俺なんかのどこがいいのか」

「お？自覚してるんだ」

「…：まあ、色々あるんで」

視線を机の下に落とし、めぐり先輩に聞こえるくらいの大ささで呟く。

「陽さんも比企谷くんのこと気にしてるみたいだし」

「雪ノ下さんは、まあ、雪ノ下のことで俺にちよっかい出してくるんですけどね」

「あはは。陽さんもシスコンだからねー」

「まあ、そうですね」

「比企谷くん、陽さんとシスコン仲間だったりする？」

「…勘弁してください」

× × ×

「…なんだか、疲れたわ」

「でも、お料理イベントが大成功ってことだし！優美子も姫菜も沙希も喜んでたし！」

雪ノ下が新しく淹れてくれた紅茶を口に運び、俺たちはほぼ同時にほっと溜息をついて、お互いの顔を見合わせて苦笑した。

「凄い偶然ね」

「息ぴったりって感じだし！」
「だな」

「このなんて言い表したらいいのかわからない、心地よい空気が、俺は好きだ。」

「…比企谷くん、由比ヶ浜さん」

「おう。どうした？」

「なーに？ゆきのん」

「…1か月後も、こうして紅茶を飲みたいわ」

「ゆきのん…。うん。そうだね」

「ああ、そうだな。…だけど一つ問題がある」

俺の言葉に、雪ノ下も由比ヶ浜もビクツツと体を震わせる。

「…問題とは何かしら？」

ティーカップを机の上に置いて、雪ノ下が聞いてくる。由比ヶ浜も不安そうに俺を見ていた。

「1か月後は、春休みだからここには集まらない」

「…そうね」

「そっか、春休みだ」

雪ノ下も由比ヶ浜も安堵した表情を浮かべる。おそらくは俺も同じような表情をしているだろう。

「…まあ、3年生になってもさ、こうやって一緒に紅茶を飲もうぜ」

「そうね。一緒に飲みましょう」

「うん。約束だよ！ゆきのん。ヒッキー」

雪ノ下の微笑みと、由比ヶ浜の笑顔、それぞれに頷き返す。
「ああ。約束だ」

4 晴れ渡る空、見つめる先。それぞれの思いが交錯する。

「八幡。おはよう。今日は早いね?」

「おはよう。戸塚。今日も可愛いな」

「八幡はすぐそうやってからかうんだから」

ぶくつと頬を膨らませる戸塚。いや、からかってないんだけど。

「それで?なんでこんな早いのか?」

「いや、なんか早く目が覚めちまってな」

「:ぼくは力になれないのかな?」

戸塚は上目づかいで俺を見て、そんなことを呟いた。

「戸塚にはいつも助けられているけど?」

「ほんと?それなら嬉しいな」

「マジマジ。今日は聞きたいことがある奴にアポを取るために早く来たただけだからさ」

「そっか。無理はしないでね。八幡」

そう言うのと戸塚は柔らかな笑顔を向けてくれた。戸塚マジ天使。

× × ×

「では本日の授業はここまで。ああ、比企谷は職員室まで来るように」
四限目の終了を告げる鐘が鳴った後、授業を担当していた平塚先生が俺を指名して教室を後にする。

「:めんどくせーな」

机の上を片付け、鞆から昼飯を取り出すと、俺は職員室へ向かうために教室を出た。階段を降りたところで平塚先生が声をかけてくる。

「それで、どんな用事だ?比企谷」

「まあちよつと、話を聞きたい奴を呼び出しているんで、俺が昼休みに違和感なく教室を出るための手伝いを先生にしてもらいました」

「ふむ。その様子だと少しは前に進めそうだな」

「どうなんでしょうね?」

「相変わらず捻くれているな、君は」

そう言うと、俺の肩を軽く叩く。

「殴り合いだけはするなよ」

「しねえよ！」

「骨は拾ってやる」

「俺が負けるの前提ですなそれ。まあ間違いじゃないですけど」

「冗談だよ。君が…いや君たちが前に進めた時には、私に報告に来てくれると嬉しい」

「…そうですね。その時は報告に行きますよ」

「その時はまた、君たちにラーメンを奢ってやろう」

その言葉に驚いて平塚先生を見ると、少しだけ面白そうに俺を眺めた後、慈愛に満ちた微笑みを返してくれた。素敵な女性だよな。本当に誰か貰ってあげて！

× × ×

自販機でマツ缶とブラックコーヒーを買い、中央階段から屋上へと向かう。1階と2階は昼休み特有の喧騒に包まれていたが、屋上の入口に着いたときは、あたりは静寂に包まれていた。

扉を押すと、まるでその存在を誇示するかのようになり、ぎいと重苦しく鳴った。

「すまん、遅くなった」

「いや、俺も今来たところだから」

爽やかに言う葉山目がけて、俺は右手に握っていたブラックコーヒーの缶を放る。葉山は危なげなく受け止めると給水塔の壁に背を向けて腰を下ろし、自分の隣の床を軽く叩く。

「とりあえず食おうか。コーヒー、ありがとな」

「おう。食うか」

葉山の隣に腰を下ろし、総菜パンの袋を開けて齧り付く。うむ、やはり焼きそばパンは最高だな！

なんだかんだで男子高校生。5分もしないうちに俺は焼きそばパンとカツサンド、葉山はサンドイッチ2パックを食い終わり、それぞれマツ缶とコーヒーを口に運んでいた。

良く晴れた青空に視線を向けて、葉山に話しかける。

「お前が千葉村で言ったアルファベットだけど、あれって雪ノ下だけじゃないよな」

「何故そう思う?」

「これは俺の勝手な想像なんだが、お前はあのアルファベットにいくつもの意味を込めていたんだろ?」

「…その意味とは?」

「雪ノ下雪乃、雪ノ下陽乃、由比ヶ浜結衣、三浦優美子。それと友情かな?」

「…まあ、否定はしない。それで、比企谷は何を知りたいんだ?」

葉山が探るように目を細めて俺を見る。

「ちよつと踏み込む必要が出来たからな。俺が知らないことを知っている葉山に聞きたいっ—か、教えて欲しい」

「何を?」

「…俺が知らない雪ノ下雪乃について、葉山が知っている雪ノ下雪乃のことを教えてくれ」

「…知ってどうする? 君たちは今のままでも十分だと思うけれど」

「言つたろ。踏み込む必要が出来たって。雪ノ下の本心を知るためにはより多くの情報が必要だ。おこがましいけど、俺の選択を確かなものにするために、雪ノ下を取り巻く状況について知っておきたい」

「わかった」

そう呟く葉山の顔には、憧憬にも似た色が浮かんでいた。最低限の礼儀として、俺はそんな葉山の視線を真正面から受け止める。

そして、葉山は語り始めた。

× × ×

放課後、由比ヶ浜が三浦や海老名さんと談笑しているのが目に入ったので、俺は鞆を持つと教壇側の扉からゆっくりと廊下に出た。

特別棟に向かつて廊下を進もうと歩き出すと、俺の前にサキサキと川崎が立ち塞がる。

「……………あの、もうすぐ休みじゃない」

「お、おう」

「……………京華が、楽しみにしてるからさ、比企谷の連絡先、聞いて

「もしい？」

「お前の弟が知ってるだろ？」

「メールだけじゃん」

「……まあ、いいけど」

俺は携帯を取り出して電話番号を表示させ、川崎の前に突き出すと、川崎は慌てて携帯を取り出し登録作業を開始した。

「……メールは？」

「ほら、これ」

「……着信確認、空メール送信、……登録」

自分の携帯を操作し終わると、川崎は俺の手から携帯を奪い取り、何やら操作を行ってから俺に返してくる。

「……登録、しといたから。……また、連絡する」

「お、おう」

「……比企谷も葉山も雪ノ下も……無器用だね」

「は？」

「……っ！なんでもない」

その場を取り繕うように川崎は言う、そのまま廊下を走って行った。スピードが速いのかスカートが舞い上がって黒いレースの何かがちらりと目に入る。

「……給水塔の上にも居たのだろうか。まあ言いふらすような奴じゃないし、いいか」

俺は軽く肩をすくめると、特別棟に向けて歩き出した。

5　そして、比企谷八幡は行動を開始する。

「こんにちは」

「うす」

部室の扉を開け、こちらを見て柔らかな微笑みを浮かべている雪ノ下と挨拶を交わす。

「由比ヶ浜さんは？」

「三浦たちと話してる」

「そう。：紅茶、淹れるわね」

「悪いな」

「私が好きでやっていることだから」

「そっか」

雪ノ下の言葉に平静を装って返事を返し、俺は椅子に座って鞆から文庫本を取り出す。

「：そう言えば、再来週から期末試験だったな。一週間前から部活禁止だっけ？」

「そうね。来週から部活は禁止ね」

「雪ノ下の淹れる紅茶もお預けか。残念だがこればかりはどうしようもないな」

「あら。比企谷くん。紅茶を楽しみにしてしてくれたのかしら？」

「……まあ、旨いからな」

「ふふ。ありがとう」

嬉しそうに頬を染める雪ノ下。それ反則だから。出会った頃の氷の女王は何処に行ってしまったの？

「比企谷くん。もし良ければなんだけれども、来週の放課後は一緒に勉強会をするのはどうかしら？」

「由比ヶ浜がうるさそうだな。けど、いいんじゃないか。勉強会。その、なんだ。三人で集まれるし」

「そうね。比企谷くんの好きなサイゼリアだと由比ヶ浜さんが集中できないかもしれないから、図書館でやるのはどうかしらっ？」

「お前、何気に由比ヶ浜を貶めてるぞ」

「でも、反論できないでしょう」

「……まあな」

お互いに顔を見合わせて苦笑すると、電子ケトルのスイッチが切れたので雪ノ下がティーポットに茶葉を入れてお湯を注いだ。

「やつはろー」

「こんにちは。由比ヶ浜さん。ちょうどいいタイミングね」

机の上に由比ヶ浜のティーカップを追加して、雪ノ下が柔らかく微笑む。

「由比ヶ浜さん。比企谷くんとも話したのだけれども、来週から放課後は図書館で勉強会をするわよ」

「えっ！なんで!?!」

「なんでって、再来週期末試験なのだけれど」

「由比ヶ浜、まさか…」

「……期末試験なんてすっかり忘れてた」

「由比ヶ浜さん…」

雪ノ下が呆れた顔で由比ヶ浜を見る。便乗して俺もジト目で由比ヶ浜を見てやった。

「ゆきのんひどい。ヒツキーキモい」

「なんで俺だけ貶められるんですかね?」

「それは比企谷くんの日頃の行いが」

「俺、何もしてないよね?」

「何もしていないことを誇られても、困るわ」

「そういう意味じゃなくて」

「もー、二人ともイチャイチャしないで!」

「はあ?」

由比ヶ浜の言葉に、俺と雪ノ下の声がハモリ、それがきっかけでお互いの顔を見合わせ、雪ノ下の頬が赤く染まり、俺の耳も赤くなった。

「ゆきのん可愛い!」

「……暑苦しいわ」

由比ヶ浜が抱きついてくるのを、雪ノ下は若干眉を顰めただけで受け入れた。なんだかんだ言っただけで由比ヶ浜には甘のんですね。

「まったねー」

「…また明日」

「じゃあな」

駅前で三者三様の挨拶をして別れる。由比ヶ浜はぶんぶんと手を振り、雪ノ下は胸の前で手のひらを小さく振る。俺は手を振る代わりに右手を頭の上まで上げた。

二人の姿が見えなくなったところで俺は自転車に跨った。ペダルに片足を載せて漕ぎだそうとしたところで、後ろから近づいてくる足音に気が付いて地面に足を下ろした。

「そろそろ来ると思ってたよ」

「へえ。さすが比企谷くん」

「俺に会いに来た理由は雪ノ下ですか？それとも葉山ですか？」

「…とりあえずどこか入らない？ちよつと長くなりそうだし」

「そうですね」

自転車から降りて陽乃さんの方を向き、それから無言で歩き始めた陽乃さんの後ろを自転車を引いてついて歩く。

繁華街の片隅にあるカフェラウンジの前で陽乃さんが立ち止まったので、店先に自転車を止めて施錠する。

店内に入り、奥の方の席に陽乃さんが座ったので、俺はテーブルを挟んで向かい側の席に腰を下ろした。

「何飲む？お姉さんのおごり」

「…じゃあ、カフェオレで」

「私はミルクティにしようかな」

ボタンを押してすぐに寄ってきたウエイトレスに陽乃さんが飲み物を注文すると、机の上に肘をつけて両手を組み、その上に顎を載せて真っ直ぐにこちらを見る。

「それで、お姉さんに何の用かな？」

「雪ノ下さんこそ、俺に何の用ですか？」

「そう来るか。やっぱ比企谷くんは面白いな」

「お褒めの言葉として受け取っておきます」

「あれ？本当にどうしちゃったの？」

そこに飲み物が運ばれてきたので、少しの間会話が中断した。

陽乃さんがカップに口をつけるが、俺はカフェオレのカップから立ち上る湯気を眺めるだけに留めた。

「飲まないの？」

「猫舌なんで」

「そう」

陽乃さんはソーサーの上にカップを置くと、真つすぐに俺を見て口を開いた。

「比企谷くん。1か月待ってくれってどういうこと？」

「見極めるための時間ですね」

「雪乃ちゃん、それともガハマちゃん？」

「…そういうのじゃないんで」

「えっ!?他に誰かいるの」

「だから、そういうのじゃないです」

少し強めに言ってから、俺は大きく深呼吸して陽乃さんを真つ直ぐに見る。

「どこまで雪ノ下雪乃に踏み込んでいいのか、見極めるための時間ですよ」

6 こうして、雪ノ下雪乃は大義名分を手に入れる。

図書館での勉強会にも慣れてきたころ。ふと思ったことがあるので思い切って聞いてみた。ちなみに由比ヶ浜は今日、三浦たちと勉強会をやるこのことで図書館には来ていない。

「そういえば」

「なにかしら？比企谷くん」

「期末試験最終日の金曜日って部活できるのか？」

「試験日は半日授業で最終日も例外ではないから、部活動も出来ないと思うわ」

「そうすると、次の月曜日まで雪ノ下の紅茶はお預けか」

思わず落胆交じりのため息が漏れる。

「比企谷くん、そんなに紅茶が好きだったの？」

「雪ノ下が淹れてくれる紅茶は好きだぞ？」

「そう…」

頬を赤らめて口をパクパクさせている雪ノ下。やべ。なんか怒らせちゃったか？

俺は慌てて雪ノ下から視線を外し、参考書を開いて勉強を再開する。雪ノ下を気にしながら。

雪ノ下はペンを置き、代わりに携帯を取り出して何やら操作しているようだ。音だけ聞いていると由比ヶ浜がそこに居るかのような錯覚に囚われる。

雪ノ下はなんとなく落ち着きがないようにも見える。傍から見ると分には凜とした佇まいの雪ノ下なのだが、なんとなく落ち着きがない。

暫くして雪ノ下の携帯が振動し、雪ノ下は再び携帯を操作してポケットに携帯をしまい込む。

「由比ヶ浜さんの許可も出たし…、コホン。比企谷くん」

何やら眩いた後、雪ノ下が俺を呼んだ。

「なんだ？」

「私が淹れた紅茶を飲みたいかしら？」

「まあ、飲めるなら飲みたいぞ?」

「そう」

そう言うのと机の上を片付け始める雪ノ下。

「今日の勉強会はこれで終わらせて、私を家まで送ってもらえるかしら?」

「…まあ、いいけど」

俺も雪ノ下に倣って机の上を片付けると、鞆に荷物を詰め込んで席を立つ。

「それでは帰りましょう」

雪ノ下は立ち上がり、鞆を手に扉へと向かう。俺はそんな彼女に置いて行かれないよう、慌ててその後を追った。

× × ×

「リビングで待っていて」

「…おう」

俺は今、雪ノ下のマンシヨンの部屋の中に居た。

勉強会を早めに切り上げ、家まで送り届けたところでお役御免とばかりに帰ろうとしたのだが、雪ノ下に止められたのだ。

「送ってきてくれたお礼に、紅茶を淹れるから上がっていつて」

マンシヨンの入り口でそう言われて、俺は断ることができず、雪ノ下の家にお邪魔することとなった。

以前お邪魔した時にはなかったものがテーブルやサイドボードの上に置かれていた。おそらくは現在絶賛同居中の陽乃さんの持ち物であろう。

その陽乃さんもここにはいない。つまりは雪ノ下と二人きりなのである。

「マジかあ…」

ソファアの背もたれに体を沈めながら、自分にしか聞こえない大きさをで呟いた。

完全に予定外の出来事である。表には出さないようにしているものの、実際はものすごく緊張していた。

由比ヶ浜とはまだきちんと話していないから、ここで雪ノ下と話す

わけにはいかない。今日は勉強会の話をして、紅茶をいただいたらとつとと帰るとしよう。

「お湯を沸かすからもうしばらく待っていてね」

「…おう」

タートルネックの水色のセーターにジーンズ姿の雪ノ下が、リビングを通過してキッチンへと消えていった。

ただそれだけなのに、なんとなく気恥ずかしい。

それは私服姿の雪ノ下を見たからなのか、雪ノ下の生活空間に居るからなのか、明確な答えはきつと出ることはないだろう。

「比企谷くん。既製品だけどビスケット食べる？お茶請けに丁度いいし」

「ああ、いただくよ」

そう返事をする、少ししてから雪ノ下がトレイにビスケットの入った木皿と、カップ類を載せて運んできた。そしてそれらをテーブルの上に置いていく。

「あ、それ」

「ええ。比企谷くんが部室で使っているものと同じよ」

悪戯が成功したかのような微笑みを浮かべて、雪ノ下が俺の前にパンスさん柄の湯のみを置いた。

「…お揃いね」

「お、おう…」

顔が熱くなるのを自覚しながら、俺はキッチンへと戻っていく。雪ノ下の後姿を眺めるのであった。

× × ×

「また、明日」

「またな」

雪ノ下の家の玄関で別れの挨拶をして、扉を開けて外に出る。鍵を掛ける音を確認してから、エレベーターを呼び出してエントランスホールを抜けてマンションの外に出る。

明日の勉強会は雪ノ下の家でやることになった。もちろん由比ヶ浜も交えることである。

自転車の開錠をしたところで、この前と同じように俺に近づいてくる足音が聞こえたので小さく溜息をつく。

「…それで、今日は何の用ですか？」

「別に用はないけど、帰ってきたら比企谷くんの姿が見えたから挨拶でもしようかなって思っただけ」

「母親に報告するんですか？」

「報告されるようなことしたの？」

「雪ノ下が同級生の男と二人きりで過ごしたっていうのは、十分報告に値することだと思いますけど？」

「ガハマちゃんが居ないのは予想外だけど、勉強会の延長線上なんですよ？そんなこといちいち報告しないよ」

「それはどうも。明日は二人でお邪魔しますけど」

「はいはい、勉強、頑張つてね」

「では、失礼します」

「ばいばーい」

右手をひらひらと振りながら陽乃さんはエントランスへと消えていった。

陽乃さんの見送りが済んだところで、俺は自転車に跨ると家へ向けて走り出した。

7　そして、俺たちは束の間の安らぎに身を委ねる。

「ゆきのーん。疲れたよー」

「まだ始めたばかりよ。由比ヶ浜さん」

「開始早々参考書も教科書もノートも開かずに疲れたってのは、ある意味斬新だな。おバカ浜」

「ヒツキー酷い！おバカ浜って言うなし！」

「おバカ浜……。ごめんなさい由比ヶ浜さん。今の状況だととてもしつくりきってしまうわ」

「ゆきのんも酷いし!？」

「いや多分、今この場に居たら三浦達も同じこと言うと思うぞ？」

「優美子まで!？」

「いや正確にはわからんけど」

三浦なら『始める前からそんなこと言うなし』とか叱ってきそうだよな。怒るじゃなくて叱るところが三浦だ。

「あ、そうだ。あたし、新発売のお菓子買ってきたんだー。ゆきのん、お皿ある?」

「まだお茶を飲むには早いと思うのだけれど」

「えー。ゆきのんの淹れてくれる紅茶、楽しみにしてきたんだけどなあ」

「…お湯を沸かしてくるわ」

「ゆきのん大好き！」

「暑苦しいわ。それに抱き着かれるとお湯を沸かしに行くことができないのだけれど」

お茶の用意をする気満々じゃねえか。相変わらず由比ヶ浜には甘いですね。ゆきのん。

結局、勉強を始める前にお茶会の準備のために雪ノ下がキッチンへと消えていった。これももう今日は勉強しないよね？

「赤点取っても知らねえぞ」

「取らないし!……多分」

「じゃあ赤点取ったら、お前のごとおバカ浜って呼ぶことにするわ」

「酷いし！ゆきのーん。ヒツキーが虐めるよー!!」

「比企谷くん。由比ヶ浜さんに謝りなさい」

「俺別に由比ヶ浜のこと虐めてないからね!? 赤点取ったらおバカ浜って呼ぶって言っただけだから」

「確かに、虐めではないわね」

「えー。ゆきのんが赤点取ったらおバカ下って呼ばれるんだよ!」

「赤点を取る気なんて更々ないのだけれど、そういう風に呼ばれるのはごめんだわバカ谷くん」

「なんで俺が貶められるんですかね?」

「おバカ浜なんて言い出したのは貴方でしょう?」

「そうだそうだヒツキーが悪い」

「へいへい。俺が悪うございました」

雪ノ下・由比ヶ浜連合に責められては方に一つも勝ち目がないので、俺は素直に白旗を上げた。

俺の言葉を聞いて、由比ヶ浜はドヤ顔を俺に向ける。ムカついたので期末試験で赤点取ったら本当におバカ浜って呼んでやることに決めた。

× × ×

「どうぞ」

「ありがとう」

雪ノ下が俺の前に置いたのは雪ノ下と由比ヶ浜の前に置かれたのと同じソーサーに載せられたティーカップだった。

雪ノ下を見ると、彼女はちらりと由比ヶ浜の方を見てから小さく微笑んで、それから人差し指を立てて自らの唇に当てる。どうやら湯のみのことは由比ヶ浜には秘密らしい。

「このお菓子当たりだし。美味しい。ゆきのん、ヒツキー、食べて食べて」

「いただくわ」

「ありがとな」

木皿に入れられていたスナック菓子を一つ摘んで口に放り込む。南瓜のポテトチップスもどきかな。悪くない。南瓜の仄かな甘さが

いい塩梅だ。

「うん。旨いなこれ。南瓜を棒状に切って揚げただけだろうけど。今度作ってみるかな」

「ヒツキー作れるの!？」

「料理ってほどでもないからな。由比ヶ浜は作っちゃ駄目だぞ。お百姓さんが泣いちやうから」

「あたしが作るとお百姓さん泣いちやうの!？」

「ああ。丹精込めて作った野菜が炭にされちまうからな」

「そんなことないし!……多分」

「言い切らないだけ成長したな由比ヶ浜」

「そんな風に褒められても嬉しくないし!」

「いいえ由比ヶ浜さん。自分のことを知ることが大事なことよ」

「ゆきのんが辛辣だし!？」

由比ヶ浜が辛辣なんて言葉を知っている、だと!？」

雪ノ下も俺と同じことを思ったらしく、まるで信じられないものを見るように由比ヶ浜を見つめていた。

「二人とも酷いし!」

「悪い」

「ごめんなさい」

ほぼ同時に俺と雪ノ下が謝ると、由比ヶ浜がくすつと笑い、それにつられて俺と雪ノ下も笑みをこぼした。

ああ。やっぱりこうして三人で過ごすのは楽しいな。

奉仕部の部室で過ごす時間も楽しいが、こうして三人で集まって過ごすのも部室と変わらずに楽しい時間であることに変わりはないな。た。

「ヒツキー、ゆきのん。えへへ。こういうのも楽しいね」

「ええ、そうね」

「ああ、そうだな」

素直に由比ヶ浜に同意する。俺だけじゃなくて由比ヶ浜と雪ノ下もこの時間を楽しんでいることが、何よりも嬉しかった。

もう少しだけこの時間を大切にしたい。たとえそれが欺瞞だろうと、俺は、いや俺たちは束の間のこの優しい時間に身を委ねていなかった。

だが、タイムリミットは決まっている。

「……期末試験が終わったら、な」

「比企谷くん」

「ヒツキー」

「だから、勉強会の間はさつきみたいに過ごしたい。……いいか？」

「そうね。そうしましょう」

「うん」

何とも言えない空気が俺たちを包み込む。その原因を作ったのは比企谷八幡。そう、俺だ。

「ごめんなさい。気が付いたら声が出ていたんです。ホント空気読めなくてごめんなさい。」

「提案なのだけれども、今日はもう勉強会って雰囲気じゃなくなってしまったからお茶会にしましょう。その代わり、今週末、明日からの三日間もここで勉強会をしましょう」

「賛成。土日もゆきのんに教えてもらえば、赤点なんて取らないで済みそうだし」

「悪い。お言葉に甘えさせてもらう」

「いいのよ。私もそうしたかったのだから」

そう言って微笑む雪ノ下を見て、俺は頭を掻くと自分以外に聞こえない声で呟いた。

「ありがとう」

8 されど確実に、比企谷八幡は歩を進める。

今日は月曜日。期末試験初日でもある。

「どうぞ」

「ありがとう。ゆきのん」

「サンキュ」

期末試験初日の放課後、俺と由比ヶ浜、そして雪ノ下の三人は、雪ノ下のマンションのリビングで弁当を広げていた。雪ノ下が紅茶を淹れてくれたのでありがたく頂戴する。まあ猫舌だからすぐには飲めないのだが。

期末試験の当日になぜ雪ノ下のマンションに集まっているのか。それは翌日の試験科目の勉強会のためである。

「明日からもこうやって勉強会をしましょう」

日曜日の勉強会で雪ノ下がそう提案してきたからだ。由比ヶ浜は二つ返事で了解したし、俺も断る理由はなかったので了承した。

期末試験は午前中で終わるので、雪ノ下のマンションに直行し、まずは昼食をとってから試験勉強をすることにした。

「ねえゆきのん。期末試験が終わったらさ、打ち上げやろうよ」

「由比ヶ浜さん、期末試験は始まったばかりよ。気が早いと思うのだけれど」

「なんて言うの? ご褒美があれば勉強を頑張れると思うんだ」

「学生の本分は勉強なのだけれど」

「ゆきのん真面目すぎだし! ねえヒツキー、ご褒美あった方がいいよね?」

俺に振るんかい! なんなのその期待のこもった眼差しは!? 雪ノ下がジト目で見てるの気付かないの!?

でも、ご褒美ってのはいいかもしれないな。

「……あー、金曜にどっか遊びに行くってこと?」

「ヒツキーが乗り気だ!」

「乗り気っつーか、雪ノ下にお礼みたいなことはしてもいいかなー。なんて考えてたりはするぞ」

「えっ!？」

「ヒツキーいいこと言った! そうだよね、ゆきのんにお礼しないといけないよね」

「雪ノ下には場所を提供してもらったのはもちろんだが、勉強も教えてもらっているし、紅茶も淹れてもらっているからな」

「別にお礼をしてもらうことでは…。私がやりたくてやっているのだから」

「あとは、その、あれだ。三人で遊びに行くのも悪くないだろう?」

「比企谷くん」

「ヒツキー」

「どこかで昼飯食って、ゲーセンかカラオケってのもたまにはいいんじゃないかね?」

「ふふ。どこかって言っても比企谷くんのお勧めはサイゼリアなのでしよう」

「ヒツキー、サイゼリア好きすぎだし!」

「うっせ。サイゼ舐めんな」

「ふふ。でも、そうね。三人で遊びに行くのもいいかもしれないわね」

「じゃあ決まり! 金曜日は三人で遊びに行くし!」

由比ヶ浜が両手を上げてそう宣言するのを、雪ノ下は小さく微笑んで見ていた。

× × ×

期末試験最終日。無事に試験も終わったところで、約束通り期末試験の打ち上げのため街に繰り出した。

サイゼリアで昼食を取り、駅前の商店街にあるゲーセンでプリクラを撮り、カラオケで若干だがストレスを発散した。

三人でプリクラを撮ったが大変だった。俺を真ん中にして雪ノ下と由比ヶ浜がくっついてくるものだから、俺硬直して動けなくなっちゃったし。それが原因で雪ノ下に『マネキン谷くん』とか呼ばれちゃったし。俺の名前、原型残ってないですね。毒ノ舌さん。

雪ノ下も由比ヶ浜も歌が上手かった。俺はまあ普通に歌えるぐらい。流行りの歌とかよくわからないし。

数年前に流行ったラブソングを歌わせられたのは参った。小町に『覚えといた方がいいよ』って言われて覚えていたのが仇になってしまった。

俺が歌い終わった後、雪ノ下も由比ヶ浜も少しだけ顔を赤くしてボーっとしてたから、怒らせたかと思って俺は三人分のドリンクを取りに部屋を出た。気の利く男、八幡。

俺がドリンクを持って部屋に帰ると、二人でデュエットしていたのでホッと胸を撫でおろした。

カラオケを出て、駅前で二人と別れて家に帰った後、携帯にメールが入っていたから確認する。

FROM：雪ノ下雪乃

TITLE：お疲れ様

今日は楽しかったわ。また、三人で遊びに行きましょう。

雪ノ下も楽しんでくれたみたいで何よりだ。

FROM：八幡

TITLE：Re：お疲れ様

俺も楽しかった。また機会があれば。

無難な返事を返すと、もう一通のメールに目を通す。差出人を見るとスパムメールにしか見えないのだが、由比ヶ浜の登録名だったことを思い出して内容を確認する。

FROM：★☆ゆい☆★

TITLE：やつはろー

また遊びに行こうね。約束だよ！

由比ヶ浜のメールを確認した後、俺は電話帳から★☆ゆい☆★を選択し、通話ボタンを押す。

『もしもし、ヒツキー?』

「なあ由比ヶ浜、明日暇か?」

『う、うん。別に用事はないけど?』

「由比ヶ浜がよければなんだが、文化祭で言ってたやつ、食いに行かねえか?」

『文化祭って、：ハニトー?』

「おう、それぞれ。で、どうだ?」

『行くっ!行くよっ!』

「じゃあ明日、何時に何処に行けばいい?」

『えーっと、じゃあ総武駅に10時で!』

「了解。じゃあ、また明日」

『う、うん。また明日!』

ガハマさん、電話でもテンション高いっすね。リア充じゃない俺にはついていけません。

「：はつきりさせないとな」

誤魔化していた感情にけりをつけるため、俺は明日、由比ヶ浜との約束を果たすことにした。

9 やはり由比ヶ浜結衣は優しい女の子である。①

土曜日の午前9時30分。俺は総武駅前に居た。小町曰く『お兄ちゃんが誘ったのなら、待ち合わせ時間より前に待ち合わせ場所に居なくちゃ駄目』とのこと。まあ、誘ったのは俺だからしょうがないよね。

由比ヶ浜はまだ来ていない。おそらくは45分着の電車に乗ってくるのだろうと予想を立てて、俺は改札のすぐ横にある自販機に向かう。マツ缶を飲んで待つていよう。

今日の目的地のパセラって、昨日行ったカラオケだよな。二日連続で行くなんて、リア充と間違われちゃうんじゃないか？まあ同じ店員さんがいるとは限らないけど。

また歌わないといけないんだよなあ。いや、カラオケだからって歌わなきゃいけないなんて誰が決めた。『ハニトー食べに来ました♪』じゃ駄目？

マツ缶を飲みながら自販機の傍で駅前広場を眺めてみる。俺の他にも待ち合わせの奴が何人か居て、そのうちの一人の所に女の子が笑顔で駆け寄っていくのが見えた。うん。青春だね。

そいつの近くに居た奴が羨ましそうに二人を見送っていると、そいつの後ろから同じ年くらいの男が来て肩を叩いた。何やら二言三言話をしてから並んで商店街の方に歩いていった。あれは友情ってやつかね？

空き缶をゴミ箱に捨て、改札口の方に目を向けると、お団子ヘアの女の子が改札口から出てくるところだった。彼女はきよろきよろと辺りを見回して、俺の方を見てパツと華やかな笑顔を浮かべると、大きく手を振りながら近づいてきた。

「やつはろー・ヒツキー」

「お、おう」

由比ヶ浜は濃紺のデニムパンツにピンクのセーター、上からベージュのコーデイガンを羽織るといった、『この冬のゆるふわコーデ』という言葉がぴったりな格好をしていた。なんとなくだけど。

「まあ、似合ってるぞ。その服」

「えへへ。ありがと」

華やかな笑顔のまま由比ヶ浜はそう言うと、一呼吸おいてから俺の左腕に両手を絡めてくる。

「ちよっ!?!」

「エスコートお願いね。ヒツキー」

「バカお前、離れる。柔らかすぎて何が何だか分からなくなるし、色々勘違いされるから」

「柔らかいって…ヒツキーのエツチ!」

「自分から押し付けてきたくせに理不尽だな!」

「うわ…ヒツキーキモい!」

「いきなり罵倒するとか、泣くよ?」

「ヒツキー弱っ!」

「…もうおうち帰る」

由比ヶ浜の仕打ちに、俺はがっくりと肩を落として駐輪場へと歩いていく。とりあえず川崎に言い負かされた平塚先生をリスペクトしてみた。

「うわわわわっ。ウソウソ!ヒツキー、ごめん!」

「八幡の取り扱いには注意しろよ。意外と繊細だからな」

「普通そういうことは自分で言わないし」

「雪ノ下は『私、可愛いから』とか自分で言ってたけどな」

「ゆきのんが可愛いのは事実だから仕方ないし」

「俺が繊細ってのも事実だつてえの」

由比ヶ浜はえへへ。と苦笑いを浮かべて俺に対する言葉を濁した。

「じゃ、いこっか?」

「そうだな」

商店街にあるパセラに向かって、俺たちは並んで歩き始める。最初から腕を組む必要はなかったんじゃないですかね?由比ヶ浜さん。

× × ×

由比ヶ浜の前に置かれたハニートー、チョコミルフィューユは生クリームやパイ生地が山のように積み重なっていた。

「凄えな、それ。俺はハニトーバナニラで十分だ」

「アイスは付けるんだ」

「甘いものは好きだからな。んじや、ま、食うか」

「うん。いただきます。生クリームうまつ！」

「いやせっかく切り込み入ってるんだから、それに合わせて格子状に切ってハニトーと一緒に食えよ」

「ヒツキーお母さんっぽい!？」

「普通のこと言っただけですけど!？」

「……ヒツキー、少し食べる?」

そう言うと由比ヶ浜は自分のフォークに生クリームとパイ生地を載せて俺の方を見た。

「……くれるっていうなら、俺のハニトーに載せてくれ」

「…ん。わかった」

由比ヶ浜はそのままフォークを俺のハニトーに近づけてクリーム類を擦りつける。ちよつとだけ俺のハニトーが豪華になったぜ。やったね八幡。

由比ヶ浜のフォークとかそういうのは考えないようにして、もそもそとハニトーを食べる。当然食べている間は二人とも無言だ。

カラオケのアーテイスト紹介映像に視線を向けながら、時折、正面に座っている由比ヶ浜を見る。んー。とか言いながらハニトーを食べる姿はげつ歯類の小動物を彷彿とさせて可愛いかった。

そう急いで食べる必要もない。俺は一時間でハニトーを食べたらすぐ店を出る計画を立てていたのだが、入店の際に由比ヶ浜がドリンクバー付き三時間コースにしゃがったのである。三時間コースの代金は払うと言われてしまえば何も言うことはできなかった。

「ねえヒツキー」

「なんだよ」

「食べ終わったらさ、昨日歌ってたやつ歌ってよ」

「お前らひいてたじゃねえかよ」

「ひいてたんじゃないよ。あれは、……格好良かったから見とれてたの」

「そ、そうなんだ…」

「……うん」

何とも言えない雰囲気になったので、俺はグラスを持って中身を一気に飲み干した。

「俺、飲み物取ってくるけど、由比ヶ浜は何にする?」

「あ、うん。じゃあコーラで」

「オツケー。行ってくる」

「ありがと」

由比ヶ浜の言葉を背に受けて、俺は廊下へと退散したのであった。

10 やはり由比ヶ浜結衣は優しい女の子である。

②

× × ×

ハニトーを食べ終わり、なんとなく由比ヶ浜と視線を合わせないようにしてカラオケのアーティスト紹介映像を眺めている。

由比ヶ浜は歌本をパラパラと捲っていたが、お目当ての曲が見つかったのか、リモコンに手を伸ばして入力をしている。

「はい、ヒッキー」

そう言っただけで由比ヶ浜がマイクを差し出すのと、昨日歌った曲のイントロが流れ出すのはほぼ同時だった。

「俺が歌い終わるまでに由比ヶ浜も何か入れておけよ」

「りょうかーい」

何事も諦めが肝心だ。俺は小さく溜息をついてからマイクを受け取り、中学時代にそこそこ流行ったラブソングを歌い始める。

何かのドラマの主題歌だった気がする。月9だったかな。学園物だった気がするがうろ覚えだ。

——放課後の教室で彼女に出会い、気づいたら恋に落ちていた。

王道の学園ラブコメ的な歌詞を口にしながら、ふと俺の脳裏に浮かんできたのは奉仕部の部室だった。

——何気ないやり取りも、大地に染み渡る雨のように僕を君色に染めていく。

いつも思うけど、ラブソングって実際に言葉にはできないよね。詩的表現って、黒歴史確実じゃん。

今声に出せているのはまあ、フィクションで歌だからってことで。

——僕だけを見つめて欲しい。君だけを見つめていたい。その瞳が閉じるとき、二人の距離は零になる。

内容が矛盾しているのもラブソングの特徴だ。お互いを見ていたいと言っただけで、次の瞬間には瞳を閉じている。まあキスの隠喩な

んだが。

——君に届けよう。この気持ちは永遠に変わらない。I will love you forever.

既に付き合っているとしか思えない間柄なのに気持ちを届けるつて変だよな。そして締め英語歌詞。まあそれがJPOPの醍醐味ってやつか。

冷静に歌詞の内容を考察しながら、早く終わらないかなー。なんて考えてみたりする。由比ヶ浜を見ると昨日と変わらずにボーっとしているから見とれていると考えるもいいのかね？まあ楽しんでもらえたなら何よりだ。

× × ×

「はー。歌った歌った」

「：暫くはカラオケ来たくねえ」

「あはは。ヒッキー格好よかったよ」

「同じ曲ばっか歌わせやがってどんな拷問だよ」

あれから交互に歌うことになったのだが、俺にはそんなにレパートリーが無いと言ったら由比ヶ浜の奴、自分の曲を入れた後に歌わせた曲を予約しやがった。結局7、8回同じ曲を歌ったんじゃないかな。最後の方は歌詞見なくても歌えるようになっていたし。

現在時刻は午後2時ちよつと前。俺としては正直このまま家に帰りたところだが、そういうわけにもいかない。

「なあ由比ヶ浜、海浜公園行かねえか？」

「うん。いいよ」

肩を並べて公園へと向かう。駅前を抜け、由比ヶ浜にとっては通学路でもある道を歩いていく。

「なんか学校に向かっているみたいでアレだな」

「うん。一緒に登校してるみたいだね」

「昼過ぎに鞆も持たずに私服で登校か。実際にそんなことしたら平塚先生に殴られそうだな」

「あはは。実際にそんなことしないし」

「由比ヶ浜はサブレの散歩のついでに登校しそうだ」

「そんなことしないし！」

頬を膨らませて抗議する由比ヶ浜から逃げるように、俺は海浜公園に向かって走り出した。20メートルほどで立ち止まり、由比ヶ浜が追い付いてくるのを待ってから再び肩を並べて歩き始めた。

「ヒツキー、いきなり走り出すのは反則だし！」

「ちよつと体を温めておいた方がいいかと思つてな。海辺だし」

「いい天気だから大丈夫だと思うけどな」

「まあノリだノリ」

「わけわかんないし！」

公園に入り、暫く遊歩道を歩いてから砂浜へと続く階段を降りる。砂を踏みしめて波打ち際まで歩いていき、冬の海に視線を落としてから、同じように隣で海面を見つめている由比ヶ浜に向き直った。

「今日は付き合ってくれて、サンキューな」

「…うん」

由比ヶ浜は小さくそう言う唇を引き結び、両手を軽く握りしめておもむろに顔をこちらへ向けた。それから大きく息を吸い込んで、良く通る声で叫ぶ。

「ヒツキー！あたし、あたしね、ヒツキーのことが好き！」

「由比ヶ浜…」

「だから、あたしと付き合ってください！」

「…悪い。俺は由比ヶ浜とは付き合えない」

「…どうして？」

縋るような眼差しで見つめてくる由比ヶ浜に、俺は偽りのない本心を告げる。

「…俺は、雪ノ下雪乃が好きなんだ」

由比ヶ浜から視線を逸らし、俺はそう答えてから顔が熱くなるのを自覚した。言葉にするのはこんなにも恥ずかしいものなのか。

「…ああ。やっぱりゆきのんかあ」

「由比ヶ浜？」

「ヒツキー風に言うのと、ゆきのんがヒツキーの本物で、ヒツキーがゆきのんの本物ってこと。でもね、あたしもゆきのんの本物にはなれると

思ってるんだ」

「それってどういうこと？」

「わかりやすく言えば、ヒツキーとゆきのんの本物は恋人で、あたしとゆきのんの本物は親友」

——本当はヒツキーとあたしの本物が恋人だったら嬉しかったんだけどね。

そんなことを呟いた由比ヶ浜はどこことなく寂しげであった。

「…お前、強いな」

「そうでもないよ。でも、予想はしていたかな。ゆきのんもヒツキーも捻くれてるけど、似た者同士だからね」

柔らかな微笑みを浮かべた由比ヶ浜の頬に、一筋の涙が滑り落ちる。

「あはは。ごめんね。今だけ、胸貸して」

そう言う由比ヶ浜は俺の胸に顔を埋め、小刻みに肩を震わせて嗚咽を漏らす。ここで由比ヶ浜を抱きしめたりする資格はないので、俺は棒立ちのまま拳を握り締めた。

どのくらいそうしていたのかは定かではないが、やがて由比ヶ浜は俺から離れていき、目元をハンカチで拭ってからくしくしとお団子髪を撫でつけて、先ほどと同じような柔らかな微笑みを浮かべた。

「ありがと、ヒツキー」

「いや、その…」

「悪くないし。ヒツキーの正直な気持ちを聞かせてもらったから、あたし、ヒツキーのこと応援するよ」

「いい奴すぎねえか、お前」

「ヒツキーとゆきのんが付き合うことになってもさ、奉仕部は続けられるよね？」

「ああ」

「そっか。良かった」

えへへ。と小さく笑う由比ヶ浜。そんな彼女を見て、俺は自然と口を開いていた。

「なあ由比ヶ浜。俺と友達になつてくれないか？」

11 この期に及んで、比企谷八幡は踏み込むことを躊躇う。

期末試験も終わり、学校も通常授業に戻る月曜日。自転車を漕いで俺は学校へと向かっている。

先週末、俺は由比ヶ浜と友達になった。

俺と由比ヶ浜の関係はクラスメイトや部活の仲間という関係を経て友達へとランクアップしたわけなのだが、ある意味これは欺瞞ともいえる関係を由比ヶ浜に強いてしまったのではないかと考えてしま

う。由比ヶ浜結衣という女の子は、少なくともF組ではトップカーストに属する、ぼつちの俺とは対照的な存在のはずだった。そんな彼女が俺のことを好きだと言ってくれたのだが、俺はそれに応えることはできなかった。

俺は雪ノ下雪乃が好きだったから。

雪ノ下雪乃。容姿端麗、才色兼備の奉仕部部长。俺なんてつり合いが取れないどころか女王と下僕と言った方が違和感がないだろう。

雪ノ下からの依頼、自分の中の本物を見つけて欲しい。奇しくもそれは俺が求めるものと同一のものであった。

いや、あえて俺と同じ言い方をするので、俺に答えを出すよう求めてきたのだと思う。

そして、答えは出ている。そう、答えは出ているのだ。

だがそれを雪ノ下に伝えることが未だに出来ていなかった。

土曜日の夜、雪ノ下の名前を表示した携帯の電話帳を眺めるだけで、通話ボタンを押すことが出来なかった。

日曜日にも暇さえあれば携帯の電話帳を眺め、一日を過ごしていた。そして今日、月曜日はいつともよりも早い時間に目が覚めてしまい、そして今、学校の校門をくぐったところである。

駐輪場に自転車を置き、閑散とした昇降口で靴を履き替えて教室へと向かう。しんと静まり返った教室で自分の机に鞆を置くと、渡り廊

下にある自動販売機を目指して歩き出した。

誰ともすれ違わないまま、自動販売機でマツ缶を購入してからベストプレイスへと歩いて行き腰を下ろす。

プルタブを起こし、一口啜って悶絶する。ホットの設定温度高すぎじゃないですかね？

答えは出ている。由比ヶ浜には伝えた。そうなってくると雪ノ下にも伝えなくてはいけない。わかってはいる。わかってはいるのだが、どうしても二の足を踏んでしまう。

「八幡」

「うおっ!？」

「あ、ごめん。驚かせちゃったかな」

「悪いな。考え事してたからいきなり声を掛けられて驚いちゃった。おはよう。戸塚。部活か？」

「おはよう。八幡。うん。まあ自主練だけどね」

戸塚はそういうと、上目遣いで見つめてくる。戸塚マジ天使。

「…その、何か悩み事かな？なんか、難しい顔してたから」

「…まあ、ちよつと、な」

「僕でよかったら、相談に乗るけど？」

真剣な眼差しでそう言うってくる戸塚。…そうだな。戸塚になら相談してもいいかもしれないな。

「…俺、由比ヶ浜に告白されて断ったんだけどさ、由比ヶ浜と友達になっただ。というのも、奉仕部の関係を壊したくなかったっていう利己的な理由でさ、それが由比ヶ浜に欺瞞を強いているようで、どうしたらいいかわからねえんだ」

「八幡に振られた後で、由比ヶ浜さんは友達になることを了承したんだよね？」

「ああ。そうなる、かな」

「それならそれは由比ヶ浜さんの意思であって、八幡が悩むことじゃないと思うけど。由比ヶ浜さんも奉仕部の関係を壊したくないから八幡と友達でいたいって考えているんじゃないかな？」

戸塚はそう言うと、俺の両肩に手を置いて真っ直ぐに視線を合わせ

てくる。

「八幡。由比ヶ浜さんと話したのはいつ？」

「土曜日、だけど」

「昨日は何していたの？」

「特に何も」

「えっ？雪ノ下さんと話していないの!？」

「な、な、な、なぜそこで雪ノ下が出てくる!？」

「八幡も由比ヶ浜さんも奉仕部の関係を壊したくないってことはさ、雪ノ下さんを含めた関係を壊したくないってことですよ？それで由比ヶ浜さんの告白を断ったってことは八幡は雪ノ下さんを選んだってことですよ？違う?」

「戸塚、お前、エスパーだったの!？」

「あはは、違うよ。奉仕部の関係を少し考えればわかることだつて」

「そ、そうか」

「そうだよ。だから八幡は今すぐにでも雪ノ下さんと話をしないといけないと思うんだけど。幸い、ホームルームが始まるまでにはまだ結構な時間があるし、部室の鍵でも借りてきて、雪ノ下さんと呼んだったらいいんじゃないかな?」

天使のような微笑みを浮かべながら、戸塚がそんなことを提案してきた。俺は小さく溜息をつくとき、本音が口から零れ落ちる。

「……………怖いんだ」

「何が?」

「拒絶されるのが」

「それって、由比ヶ浜さんと雪ノ下さんを馬鹿にしてるよね?」

「……………え?」

「由比ヶ浜さんが告白を断られても八幡と友達でいるってことは、雪ノ下さんと友達でいたいからってことですよ?」

「……………多分」

「それって彼女たちの間で協定が結ばれているからだと思うんだけど。どちらが選ばれても恨みつこなしみたいなの」

「……………そうなのか?」

「そうじやなきや友達になんてならないよ。僕がもし由比ヶ浜さんの立場だったら、振られた時点で部活もやめて八幡たちに関わらないようにするよ。好きな人が他の人と仲良くしている姿を見続けるなんて耐えられないし」

戸塚はそう言い切ると、俺の両肩に乗せた手を持ち上げ、俺の両肩を強く叩いた。

「ちゃんと雪ノ下さんと話すんだよ八幡」

12 やはり俺たちの青春ラブコメはまちがっていた。

職員室の扉の前で俺は大きく深呼吸をしてから扉を開く。

「おはようございます。平塚先生」

「……………比企谷。どういう風の吹き回しだ？」

「いえ、ちよつと部室に忘れ物をしたので、部室の鍵を借りようかなあ」と

「ふむ。忘れ物、ねえ。月曜日の朝に取りに行かないといけないものってなんなんだ？」

「あー、アレですよアレ。宿題のプリント。部室で解いてそのまま置き忘れたみたいだな」

「ほう。おかしいな。そのような宿題は出ていないはずだが」

「現国じゃないですから」

「無論、現国でも出していないが、他教科でも金曜日にプリントを宿題として出したところはないはずだぞ。そういったものは教員会議で決めるからな」

じわりと背中に汗が滲むのを感じながら、平静を装って会話を繋げようと口を開きかけて、平塚先生の言葉に遮られた。

「先ほど奉仕部の部長が来て、お前たちにとって大切なものをお前が持って来てくれるから部室で待つ、と言って鍵を持って行ったんだが」

雪ノ下がすでに部室で俺を待っている、だと…。

「し、失礼します」

「比企谷」

動揺を表に出さないように挨拶をして職員室から出ようとしたところで、後ろから平塚先生に声を掛けられる。

「……………なんすか？」

「今日の夕飯は三人でラーメンになりそうか？」

「……………先生が奢ってくれるなら、そうっすね」

まったく、この人には敵わないな。

「……………はあ。結婚したい」

本当に誰か貰ってあげて！

× × ×

部室の扉の前で、俺は立ち止まって目を閉じる。

この部屋の中に雪ノ下が居る。

平塚先生から聞いた話から推測するに、おそらく由比ヶ浜から雪ノ下に連絡がいつて土曜日のことを聞いたのだろう。

土曜日の由比ヶ浜の言葉を思い返してみると、戸塚が言っていた協定が雪ノ下と由比ヶ浜の間に締結されているのはまず間違いないと思う。

由比ヶ浜がそれを踏まえた上で雪ノ下に連絡を取ったのだとすれば、雪ノ下が部室で俺を待つという行動を起こしたのは必然だろう。

この扉の向こうで雪ノ下が俺を待っている。

思い起こせば俺と雪ノ下の出会いは最悪だった。それでもいくつかの出来事を体験するごとに、少しずつ確実にお互いを知り理解していくうちに、俺は雪ノ下に対して他とは違うものを感じるようになっていた。

大きく深呼吸をしてから目を開け、目の前の扉を叩く。

「はい。どうぞ」

涼やかな声が耳朶に響く。俺は扉を開けて部屋の中へと歩を進めた。

「比企谷くん。おはよう」

「……………うっす」

「そこはおはようと返すところだと思うのだけれど」

「ん、おはようさん」

静かに微笑む雪ノ下に見惚れながら、俺は後ろ手で部室の扉を閉め、雪ノ下の方へと歩み寄っていく。

「……………由比ヶ浜さんに聞いたわ。比企谷くん。由比ヶ浜さんとお友達になったそうね」

「ああ。由比ヶ浜とは友達になった」

自分の椅子を通り過ぎ、机を回り込んで雪ノ下の横へたどり着くと、雪ノ下は椅子に座ったまま俺を見上げた。その瞳は幾分不安そうな色を浮かべているように見える。

「私は、比企谷くんにとって何になるのかしら？」

「その質問に答える前に、雪ノ下に伝えたいことがあるんだけど」

「あら？なにかしら？」

不安そうに見つめる雪ノ下から視線を逸らさずに、俺は大きく息を吸い込んだ。

「好きです。俺と付き合ってください」

声に出した瞬間、目を閉じて身を固くする。しようがないよね、とてもじゃないけど直視できないし。

雪ノ下は今、どんな表情を浮かべているのだろうか？何を考えているのだろうか？俺は間違ってしまったのだろうか？

そんなことを考えていると、不意に俺の左頬に何かに触れたので、驚いて目を開けると、雪ノ下が右手を伸ばして俺の頬に触れていた。

「比企谷くん。そんな風に目を閉じられたら返事ができないのだけだ」

「悪い」

「やり直し。もう一度、今度はきちんと目を開けたまま言いなさい」

「ええ…」

「……お願い」

潤んだ瞳でそんなことを言うのは反則だ。雪ノ下。

「好きです。俺と付き合ってください」

「はい。よろしくお願いします」

そう言うと雪ノ下は真っ直ぐに俺を見つめ、ゆっくりと瞳を閉じて顎を上げた。その頬は若干紅潮している。

そのまま吸い寄せられるように、俺は雪ノ下の肩に手を置いて、雪ノ下との距離を零にした。

「……………それで、私は比企谷くんにとって何になるのかしら？」

「そうだな。雪ノ下雪乃は比企谷八幡にとっての本物だ。じゃあ、俺は雪ノ下にとって何になるんだ？」

「あら、そんなの決まっているじゃない。比企谷八幡は雪ノ下雪乃にとつての本物よ」

「ということは、依頼完了ってことでいいのか？」

「ええ。貴方の方も依頼完了ということになるのかしら？」

「そうだな。依頼完了だ」

顔を見合わせて微笑みあい、それからどちらからともなく再び唇を重ねてから、俺は腰を曲げて椅子に座る雪ノ下を抱きしめると、その耳元で囁いた。

「愛してるぞ、雪乃」

「バカ、アホ、大好き、八幡、愛してる」

罵倒かと思わせておいて嬉しいことを言ってくれる雪ノ下。

結局、始業前のチャイムが鳴るまで俺たちは抱き合ってたまま、短くはない朝の時間を過ごしたのであった。

捻くれたぼっちと孤高のぼっちが紆余曲折を経てくつついたただけだと周りは言うかもしれないが、俺も雪ノ下も気にすることはないだろう。

なぜなら、お互い手に入れたいものを手に入れたのだから。

了

エピソード①

朝の奉仕部の部室で俺と雪ノ下は抱き合っていた。先ほど告白をして受け入れてもらった結果である。

「比企谷くん。私たち、恋人同士になったのよね」

「お、おう。そうだな」

「貴方、自分は雪ノ下と釣り合わないから、付き合っているのは内緒にしておこうとか言うつもりでしょうけれど、却下よ」

まさにその通りなのだけれど。と雪ノ下風に考えながら俺は抵抗を試みる。

「いや、でもな」

「比企谷くんが私を選んだように、私が比企谷くんを選んだのだから、そんなことを考えるのは禁止。私たちはお互い本物を手に入れたのよ。それは隠すようなものじゃないし、私としては隠したくないのだけれど」

じわりと胸が熱くなるのを感じながら、俺が雪ノ下の恋人と周知されることで雪ノ下が被るであろう被害を想像して説得を試みる。

「様々な悪行を行った目の腐ってる男だぞ？どうひいき目に見ても雪ノ下雪乃とは釣り合わないし、周りから何言われるかわからねえぞ」
「他人のことなんて気にしないわ。だから貴方も他人のことなんて気にしないで」

「俺のせいでお前が悪く言われるのは嫌なんだけど」

「それを言うなら私のせいで貴方を悪く言われるのも嫌なのだけだ」
「ど」

何かが俺の頬を濡らしている。目の前がぼやけて見える。

「甘えてもいいのか？泣き言を言ってもいいのか？」

「ええ。受け入れるわ」

雪ノ下の肩を借りようとすると、雪ノ下はそっと俺の頭を押さえて自分の胸元に抱きしめて頭を撫でてくる。なにこれ、凄い恥ずかしい。っていうか想像していたよりもずっと柔らかいです。

「私は貴方を絶対に裏切らないわ。貴方を愛してるから」

「…ありがとう。俺も絶対に裏切らないことを約束する」

「あら、それだけかしら？」

「愛してる。雪乃」

「よくできました」

そう言つて微笑むと、雪ノ下は両手で俺の顔を持ち上げて唇を重ねてきた。それを受け入れた後、俺は雪ノ下の前では思っていることを素直に口にすることを決めた。

「抱きしめて、いいか？」

「ええ」

雪ノ下を抱きしめ、視線の先にある白い首筋を見つめて、鼓動が跳ね上がるのを自覚した。

「比企谷くん。鼓動が早くなつたわよ。まあ、私もなのだけれど」

「付けていいか？つていうか、付けたいんだが」

「付けるって、何を？」

「キスマーク」

「……………いいわ。その代わりに、私にも…あつ、ん…」

許可をもらった次の瞬間には、雪ノ下の首筋に吸い付いていた。小さく体を震わせる雪ノ下がとても愛おしく感じる。

俺が雪ノ下の首筋から唇を離すと、雪ノ下の両手が俺の肩に置かれていて体を押し戻されていた。赤くなつた顔で俺を睨むと、雪ノ下は小さく呟く。

「お返しよ」

そして俺たちの首筋には、お互いの印が付けられたのであった。

× × ×

「ふーふー、ふーふー」

放課後の部室。雪ノ下はパンさんの絵柄の湯のみを自分の口元に持つていき息を吹きかけている。俺は椅子に座つて机の上の文庫本を眺めていた。

「このくらいでいいかしら？」

「おう、ありがとう」

「どういたしまして」

雪ノ下は微笑んで湯のみを俺の前に置き、机の上にあつた文庫本を手にとって腰を下ろした。

俺は湯のみを手にとると、一口紅茶を啜ってから机の上に湯のみを置く。

「うん。旨い」

「よかったわ」

雪ノ下が微笑みを浮かべたとき、部室の扉が勢いよく開かれて、亜麻色の髪の少女が室内に飛び込んできて俺たちの目の前で机に突っ伏した。

「せんぱーいっ！はうつ！?…あれ、いつも通りなら先輩に抱き付けるはずなのになんで?」

「…何やってんの?」

「そうね。なぜ一色さんは机に突っ伏しているのかしら?」

俺の左肩に頭を載せて雪ノ下が呟く。一色はがばつと顔を上げて俺と雪ノ下を交互に見ると、わなわなと体を震わせた。

「なんで雪ノ下先輩が先輩に寄りかかっているんですか? つていうか、なんで先輩も雪ノ下先輩の隣に座っているんですか?」

「んー、まあ、アレだ」

俺はそう呟くと、左手で雪ノ下の頭を撫で、その感触を堪能しながらなんでもないことのように言う。

「相思相愛ってやつ」

「ひ、比企谷きゅん…」

なんだそれ、可愛いな。

「え、ええええええつつ?! 雪ノ下先輩騙されてないですか? 先輩ですよ? 目が腐ってるゾンビな先輩ですよ!？」

悪かったな、おい。

そつと雪ノ下の左手が俺の右頬に添えられ、そのまま雪ノ下の方へと顔の向きを変えられる。雪ノ下は真っ直ぐに俺の目を見つめて、小さな微笑みを浮かべた。

「ふふ。一色さん。貴女から見ると比企谷くんの目は腐ってるように見えるかもしれないけれど、私を見る目はすごく優しいのよ。だから

私は騙されてなんていないわ。私たちは確かに相思相愛なのだから。
ねえ、八幡」

「お、おう。雪ノ下」

「雪乃、でしよう?」

「……雪乃」

「ふふ。よくできました」

妖しく笑うと、雪ノ下はそのまま体を起こして、唇を合わせてきた。
咄嗟のことに反応できず、俺は目を見開いたままそれを受け入れる。

「ぎにやあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああっ!!雪ノ下先輩が先輩にキ、キ、キ、キ、きゃああああああ
ああああああああああああっ!!」

顔を真っ赤にして一色が部室を飛び出していく。律儀に扉を閉めていくあたり、さすがは生徒会長といったところか。

「人前で名前で呼んでキスしてくるなんて、お前もずいぶん大胆だな」

「だって、貴方の悪口を言うんですもの。それに私たちは相思相愛ってことを見せつけておかないといけないと思っただけれど」

「まあ、そうだな。隠すことじゃないしな」

「そうでしょう。じゃあ、これからはいつでも八幡って呼ばせてもらおうわ」

「じゃあ俺も、これからは雪乃って呼ぶぞ」

「嬉しいわ。八幡」

「俺もだ。雪乃」

どちらからともなく唇を合わせると、俺たちは暫くの間、部室で抱き合うのであった。

エピローグ②

× × ×

部室の鍵を返しに職員室の扉を開け、真っ直ぐに平塚先生の元へと歩いていく。

「平塚先生、約束通り夕飯を御馳走になりました」

「まあ確かにラーメンを奢ってやるとは言ったが、もう少し私に配慮してくれてもいいのではないか？」

俺の方へと振り返り、少し涙目になりながら平塚先生は言った。

「その、平塚先生に配慮とは？」

雪乃が首を傾げて平塚先生に尋ねる。俺の左腕を抱きしめた状態で。それ、喧嘩売ってますから！自重して、ゆきのん！

「と、とりあえず部室の鍵をお返しします。えーっと、俺たちはどこで待ってればいいですかね？」

「……校門前で待っていてもらえればそちらに車を回す」

「わかりました。それでは校門前でお待ちします。行くぞ、雪乃」

「ええ。行きましょう。八幡」

「名前呼びだと……。畜生！見せつけるな！」

「すみませんでした!!」

「はあ、結婚したい……」

平塚先生に謝罪の言葉を投げ付けて職員室を後にして、扉の向こうから大きなため息とともに聞こえてきた言葉には、ものすごく重い何かが籠められていた。

本当に、誰か貰ってあげて！

× × ×

「ふーふー。ふーふー」

雪乃が箸で掬い取りれんげに載せたラーメンに息を吹きかけているのを眺めながら、俺も自分の箸で持ち上げたラーメンに息を吹きかけた。俺たちの前に座る平塚先生は漢らしくラーメンを啜っている。

「ずずつ。うん、旨い」

「……っん。確かに美味しいわね」

「意外と大口を開けられるんだな」

雪乃がれんげを口に入れたのを見て正直な感想を言うと、雪乃は頬を赤くしながら俺を見る。

「…啜るのは苦手なのよ。その、食べるところをそんなに見ないで欲しいわ。恥ずかしいのだけれど」

「お、おう。悪い」

視線を目の前のラーメンに戻して、再びラーメンを箸で持ち上げて息を吹きかける。そうすると隣からも息を吹きかける音が聞こえてきたので、今度は視線を向けないようにしながら食事に集中することにした。

「ふむ。雪ノ下には向いていなかったか。陽乃は気に入ってる店なのだがな」

俺がラーメンを食べ終わりそうになった時、口角を上げて平塚先生がそう言い終わると同時に店の入り口の扉が開いた。

「ひゃっはろー。お待たせ静ちゃん。あ、醤油豚骨ラーメン一つお願いしまーす」

「あいよ！醤油豚骨一丁！」

「その呼び方は止めろと言っているだろうが」

「えー、良いじゃん別に。あ、雪乃ちゃんと比企谷くんもひゃっはろー」

「……………どうも」

「……………」

「雪乃ちゃんが冷たいっ！」

大げさに泣き真似をする雪ノ下さんを見て、俺は隣の雪乃へと視線を向けると、雪乃はれんげを口に含んだまま固まっていたので、これはヤバいと思って慌てて雪乃の口かられんげを引き抜いた。れんげを引き抜いた後、雪乃の喉が小さく動いたのを確認できたのでほっと胸をなでおろす。

「大丈夫か？」

「……………突然姉さんが現れたから驚いてしまったわ。これは八幡の差し金かしら？」

「いやどう見ても平塚先生が黒幕だろうよ」

「ふふ。冗談よ」

小さく微笑む雪乃にれんげを返すと、前の席に座った雪ノ下さんに向き直ってから小さく溜息をついた。

「平塚先生から聞いたと思います。雪乃さんとお付き合ひさせていただきます。よろしくお願ひします。お義姉さん」

「……………は？比企谷くん？今、なんて？」

「く、くくくつ。そういうことだ、陽乃」

「そういうことってどういうこと？静ちゃん」

「お前は比企谷の義姉という立場になったということだよ陽乃。しかし比企谷。お前もなかなかやるな。陽乃のこんな表情を見られるなんて思わなかったぞ」

「まあ、遅かれ早かれわかることですからね。なんで雪ノ下さんを呼んだんですか？平塚先生」

「ん？リア充なお前らへの腹いせだが」

教育者にあるまじきこと言っちゃったよこの人。

「えーと、雪乃ちゃんと比企谷くんが恋人になったってことでもいいのかな？..」

「ええ。その認識で間違いないわ。姉さん」

「ふうん。そうなんだ」

目を細めて俺と雪乃を見比べる雪ノ下さん。その冷徹な眼差しを俺たちは真正面から受け止めつつ、どちらからともなく机の下で手を繋いでいた。それに気づいた平塚先生は涙目になって雪ノ下さんのラーメンを持ってきた店員さんに追加のラーメンを注文し、雪ノ下さんはにやりと唇を歪めた。

「それが、貴方たちの本物？」

「はい」

「ええ」

俺と雪乃がほぼ同時に返事を返すと、雪ノ下さんは小さく微笑む。

「うん。合格」

そう言うと、雪ノ下さんは鞆からスマホを取り出してどこかに電話

をかける。

「あ、お母さん。雪乃ちゃんの所に居る必要無くなったから家に帰るね。うん。詳しくは帰ってから話す。うん。じゃあ八時頃に雪乃ちゃんのマンションの下に車を回してもらえるかな？うん。じゃあ後で」

「…姉さん？」

怪訝そうに雪乃が呼ぶと、雪ノ下さんは鞆にスマホをしまってから片目を閉じて言った。

「比企谷くん。雪乃ちゃんをお願いね」

エピローグ③

× × ×

「……………どうしてこうなった？」

ソファ―に身を沈めてリビングの天井を眺めながら、俺はそう呟いた。

そんな俺の肩に頭を載せて寄りかかる形で、雪乃が小さな寝息を立てていた。

× × ×

平塚先生に雪乃のマンションまで送ってもらい、雪ノ下さんの荷造りを雪乃と二人で眺めつつ、雪乃と一緒に雪乃が淹れてくれた紅茶を飲んだ。

そうしているうちに雪ノ下さんが荷物を纏めて部屋を出たので、雪乃と一緒にエントランスまで見送りに出た。

すでに車が到着していて、雪ノ下さんは後部座席のドアを開けて荷物を積み込んでそのまま車内へと滑り込むように乗り込み、窓を開けて雪乃に手招きをして側に呼ぶと、その耳元で何かを話して、それからすぐに去って行った。

やけにあっさりしているなあと思いつつながら、時間も時間なので俺も帰ることにして、車道脇で車を見送っている雪乃の側に近づいた。

「んじや、俺も帰るわ」

雪乃にその声をかけて歩き出そうとしたところで、後ろから制服の袖を掴まれた。

「鞆を置いていくつもり？」

「お、おう。そうだったな」

「一旦、戻りましょう」

「わかった。わかったから引つ張らないでくれ。転びそうだ」

そのまま後ろに引つ張られてエントランスへと連行されそうになったので、足を踏ん張って抵抗すると、雪乃は制服の袖から手を放して、左手を俺の前に差し出した。

「では、きちんとエスコートしなさい」

「雪乃の家に戻るんだから、雪乃がエスコートしてくれるものじゃねえの?」

「…そうね、今のところは私が主ということになるのだから、私がエスコートしないといけないわね。では、行きましようか、八幡」

そう言うとき雪乃は俺の右手に自分の左手を重ね、指を絡めてしっかりと手を繋いだ。まあその、いわゆる恋人繋ぎってやつだ。

そのまま横並びでエントランスを通り、エレベーターに乗り込むとき雪乃は自分の部屋のある最上階のボタンを押す。扉が閉まりエレベーターが上昇を始めたところで、雪乃がぼそつと呟いた。

「もう少し一緒に居たいわ」

× × ×

「……ん。はちまん…」

俺の左肩にもたれかかって艶めかしい声で俺の名を呼ぶ雪乃。

信じられるか?これ、眠っているんだぜ。

手持ち無沙汰なので、もたれかかっているのは反対の手で雪乃の頭を撫でてみたりしたら、この有様だよ。いつもの凜とした雪ノ下雪乃は何処に行ってしまったのでしようね。

……まあ、それだけ甘えてくれているということ嬉しんだが。

「…可愛いな」

自然とそんな言葉が零れる。しょうがないよね、可愛いんだから。

傍から見ればニヤけてるんだろうな俺。絶対、由比ヶ浜が見たら『ゆきのん可愛い!ヒッキーキモい!』って言われるな。俺と付き合う前の雪乃が見たら『気持ち悪いわね、ニヤけ谷くん』とか言うかも知れない。

……なんか悲しくなってくるからやめておこう。今の雪乃にそんなこと言われたら耐えられないと思うし。

「……八幡?」

「お、起きたか。おはよう雪乃」

「ごめんなさい、ついうとうとしてしまいましたわ。ところで何故そんな

辛そうな顔をしているの?」

「ん?笑わないか?」

「場合にもよるのだけれど」

「雪乃の寝顔を見ている自分がニヤけているだろうなと思ったら、付き合う前の雪乃が見たらどんな罵倒が飛んでくるだろうなと考え、その言葉を今の雪乃に言われたら耐えられないだろうなあつて思つて」

「そうね、ニヤけ谷^{がや}くんか卑猥^{がや}谷^{がや}くんって呼んでいたかもしれないわね。付き合う前の私だったら」

「……うん、想像してたのもそれ」

やはり堪えるなあと思つてしていると、雪乃は俺の頬に手を当てて目線を合わせてきた。

「ふふ。恋人の笑顔を見てそんなことは言わないわよ。まあ、目は閉じるかもしれないけれど」

言つてから実際に目を閉じる雪乃。え?それどういうことなの?

「……目覚めのキスをして頂戴」

雪乃はそう小さく呟くと、目を閉じたまま顎を上げて唇を俺に向かつて突き出した。

もちろんその申し出を断るはずもなく、俺はそつと雪乃と唇を交わすのであつた。

エピソード④

× × ×

なんていうか、濃い一日だった。

戸塚に背中を押されて雪乃に告白をして、恋人になった。

キスもしたし、泣き言を言っても受け入れて貰えたし、独占欲からお互いにキスマークを付け合った。

一色の前で名前呼びをされてキスしたり、お互いを名前で呼ぶことにした。

平塚先生にラーメンを奢ってもらったり、雪ノ下さんに雪乃と恋人関係になったことを報告したりした。

雪ノ下さんが雪乃のマンションから荷物を纏めて出て行った。

そして今、雪乃の部屋のリビングでソファに座って雪乃と寄り添っている。

「八幡? どうしたの?」

「ん? ああ、今日だけで色々あったなあって思ってる」

キスマークはやりすぎだった気がしてきたが、気にしないでおう。感情に流されちゃうことってあるよね。うん。雪乃も付けてくれたし。

「そうね。でも、こうして八幡と一緒に居られるのは、嬉しいわ」

「俺も、雪乃とこうして一緒に居られるのは、嬉しい。でもな、今日はこの辺で帰らないといけないと思うんだが」

「そう……」

雪乃は小さく呟くと、左肩に頭を載せてもたれかかってくる。

「……もう少しだけ一緒に居たいのだけれど。その、こうやって八幡と恋人になれたということを感じていきたいの」

「俺もできることなら雪乃と一緒に居たいけど、さすがにそろそろヤバい時間だろう? 風呂にも入らないといけないだろうし」

「一日くらい入らなくても私は別にかまわないのだけれど」

「まあなんだ、明日も学校あるしさ」

「八幡と二人で登校するのも悪くないわね」

「俺の寝間着とか布団とかないしき」

「カモフラージュ用の男性用の服はあるわよ？ 来客用のお布団は姉さんが使ってしまったから私が使うわ。八幡は私のベッドを使ってくれればいいし」

「いやなんで泊まることが前提になっているの？」

「駄目、かしら？」

首を傾げて俺を見上げる雪乃。いや、待て。その仕草は一色よりもあざといから。

「ちよつと待て、雪乃のベッドを使えつてどういうこと？」

「そのままの意味なのだけれど。姉さんの使ったお布団に八幡を寝かせるわけにはいかないもの」

「うん、いったん落ち着こう。俺は家に帰るつもりなんだけど」

「姉さんも認めてくれたし、姉さんが言うには母さんも認めてくれたってことだから、私としては八幡と一緒に居たいのだけれど」

「いつの間にか家族公認になっている!？」

「うふふ。そうよ、家族公認なのよ」

「いやそれでも親しき中にも礼儀ありつて言うだろう？ 恋人になった日にお泊りするつてのはダメだと思うんだけど」

嬉しそうに微笑む雪乃を見て流されそうになりそうな俺が居る。

いやいや、流されてはいけない。

「その、俺は雪乃のことを信頼しているし、大切にしたい」

「嬉しいわ。私も、八幡のことを信頼しているし、大切にしたいわ」

「あー、その、ありがとう」

「どういたしまして」

「俺がこんなに素直になれるのは雪乃の前だけだ。少なくとも今日一日でそんなことが言えるくらい、雪乃とは信頼し合える仲になれたってことだけは胸を張って言える」

普通に雪乃って呼び捨てに出来るし、思っていることを素直に伝えることも出来る。その、少し恥ずかしいけど甘えたりも出来る。

昨日までの俺からしたら考えられないくらいの変化だと思う。

それに雪乃も普通に名前呼びしてくれるし、素直に甘えてくれるこ

とがとても嬉しい。

「私も八幡の前では素直な自分を出せるわ。ふふ。昨日までの私だったら八幡って呼ぶことも出来なかったわね」

「俺も同じだな。自然に名前呼び出来るようになったし、雪乃には素直に話したり、甘えたりできる」

「そうやって心が通じ合ったのに、八幡は私を一人にするのかしら?」

「心が通じ合ったからこそ、離れても大丈夫だと思っただが」

「狡いわね」

「まあ、その、だな。準備不足だから今日の所は帰らないといけないってのが偽らざる俺の気持ちだ」

「何の準備かしら?寝具も着替えもあるのだけれど」

不満げに言う雪乃を見て、俺は小さく溜息をつく雪乃を自分の方へと引き寄せて耳元に唇を寄せた。

「避妊具がねえから泊まれないってこと」

「ひにつつ!?!」／／／

「俺だつて男だ。好きな女と一晚を共にして手を出さないのは無理」

「馬鹿、変態、スケベ、八幡!」

おい、八幡は罵倒じゃねえだろ。

心の中で文句を言うと、雪乃は上目遣いで俺を見て口をもによもによと動かした。とつても可愛いもの。

「……………その、そういうものなの?」

「え?何が?」

「添い寝だけじゃ駄目なの?」

添い寝ねえ。背中合わせとかで寝ればたぶん大丈夫だろう。まあ一睡もできないだろうけど。

「……………雪乃、男は狼なんだ」

「八幡が狼なら、さしずめ私は赤ずきんといったところかしら?」

「まあある意味、間違っではないいな」

「…そう。じゃあ、八幡が泊まってくれるのは準備が出来たときなのね」

「まあそうなる、な」

雪乃から視線を逸らすと、今度は雪乃が俺の耳元に唇を寄せてそつと囁いた。

「その時は、優しくしてね」

エピソード⑤

× × ×

「ただいまー」

「おかえり。お兄ちゃん」

気だるげに玄関でお決まりの言葉を口にして、そのまま廊下を通り階段へと向かう途中でリビングから声を掛けられたので、小さく溜息をついてからリビングを覗き込む。

「メールした通り夕飯は食べてきたぞ。平塚先生にラーメンを奢ってもらった」

「お兄ちゃんだけ?」

「いや、雪乃も一緒に」

小町の目が見開かれ、凄い勢いで立ち上がると俺の側に駆け寄ってきた。目を爛々と輝かせて。

なんなのその獲物を目の前にした肉食獣のような目は?

「お兄ちゃん!今、雪乃さんのこと呼び捨てにしたよね?どういこうと!」

……ああ、そういうことね。

自然に名前呼びしちやいました。てへっ。

「まあ、あれだ。雪乃と恋人になった。そのお祝いで平塚先生に奢ってもらった。ついでに言うとな雪ノ下さんにも報告済。あと、由比ヶ浜とは友達になった」

「お兄ちゃん!小町的に超ポイント高いよ!特に結衣さんと友達になっただけのが!」

「まあな」

「じゃあ小町は、これから雪乃さんのことを雪乃お義姉ちゃんって呼ぶことにする。小町的にポイント高い!」

「はいはい、高い高い」

「なんか投げやりだ!」

「まあ、色々あったからな。ちよつと疲れた。それに、その、アレだ」
「アレって何?」

「顔が熱くなるのを自覚しつつも言葉にして伝えることにする。」

「雪乃に電話したい」

「お兄ちゃんがデレたっ!？」

「悪いかよ。まあその、小町以外にも甘えられる奴が出来たってことで許してくれ」

「ん。そういうことなら許す」

「じゃあ、おやすみ」

「うん。おやすみ。お兄ちゃん。雪乃お義姉ちゃんによろしく」

× × ×

『はい、雪ノ下です』

「雪乃か？俺だけど、今大丈夫か？」

『八幡？もちろん大丈夫よ。どうかしたの？』

「雪乃の声が聞きたかったのと、おやすみくらいは言っておこうかなと思ってな」

『ふふ。嬉しいわ。その、私も八幡の声が聞きたかったの』

「俺も嬉しいぞ。それでだな、小町が雪乃のことを雪乃お義姉ちゃんって呼びたいって言ってたぞ。あと雪乃お義姉ちゃんによろしくってさ」

『ふふ。そう呼んでもらって構わないと伝えておいてくれるかしら？

あと、こちらこそよろしくお願いしますと小町さんに伝えておいて』

「おう、わかった」

『ねえ、八幡』

「ん？どうした？」

『その、いつ泊まりに来てくれるのかしら？』

「当分の間は無理だぞ。勉強を教えてもらいには行くけれど泊まるのは当分後だ」

『…私の方で準備しておこうかしら？』

「やけに積極的だな。もう少し恥じらいというものを持った方がいいと思うんだが。まあ嬉しいけど」

『不安なのよ。母さんの気が変わらないうちに、既成事実を作っておきたいの』

「なあ、それはまずいんじゃないか？責任感無しと思われる気がするんだけど」

『八幡以外とは嫌なのだけけれど』

「そういうことじゃなくてだな。なあ、俺たちが付き合うのって家族公認だつて言っていたよな？」

『ええ。今のところはそのはずよ』

「そうか、なら、話は早いかもしれない。雪乃、明後日の卒業式が終わったら雪ノ下の家に行こう。お義母さんにアポを取っておいてくれ」

『八幡、何をする気なの？』

「雪乃と俺の婚約を認めてもらうようにはお願いしに行く。家族公認ということならより確実に認めてもらえば問題ないだろう？」

『八幡！愛してるわ』

「俺も愛してる。だから雪ノ下雪乃さん。俺と婚約してください」

『はい。よろしくお願いします』

× × ×

終業式に続いて卒業式が終わると、俺はすぐに体育館を出て昇降口へと向かう。

昇降口から校門の間には、卒業生が部活の後輩や仲間に囲まれて別れを惜しんでいる姿が数多く見受けられるが、それらには目もくれず、俺は昇降口の側で雪乃を待っていた。

暫くして昇降口から出てきた雪乃は、俺の姿を認めると安心したような表情を浮かべて、俺の右腕を両手で掴んで抱き着いてくる。

「お、おい」

「八幡、このまま私と一緒に来てくれる？話したこともない先輩から呼び出されているのだけれど、言葉よりも見てもらった方が早いと思うし、他の人への牽制にもなるから」

「ん。そういうことならしょうがないな」

雪乃にしがみつかれたまま、俺のベストプレイスだった場所の近くへと歩いて行く。先ほどから感じる他の生徒の視線はこの際気にしないことにした。雪乃も気にしていないしな。

校舎裏と言うのに相応しい場所に立っているイケメンの男子生徒が雪乃を呼び出した先輩だろう。彼は近づいてくる俺たちを見て――おそらく雪乃の姿を確認して――一瞬だけ顔に喜色を浮かべ、それから表情を曇らせた。

「こんな人気のないところに呼び出されて身の危険を感じたので、彼についてきてもらいましたけれども、どのような要件でしょうか？」

雪乃は冷たい声でそう言うと、俺の左腕を両手でぎゅっと掴んだ。

「あー、その、彼って？」

「私の恋人ですが？」

「あ、そうなんだ。うん、その、雪ノ下さんのこといいなって思ってたからさ、呼び出したんだけれど、恋人がいるなら、うん、ごめんね。そういうことだから」

「はい。ご卒業おめでとうございます。さようなら」

「あ、うん。さようなら」

すぐごと去っていく先輩の姿が見えなくなったところで、俺と雪乃は顔を見合わせてから小さく微笑みあった。

「きつついだろ、これ。でも、まあ先輩にはいい薬にはなったんじゃないか」

「どうして話したこともない相手に告白をしようなんて思うのかしら？理由がわからないのだけれど」

「雪乃は美人だからな。それだけでも告白しようとする奴は多いだろう？」

「見た目だけで決められても嬉しくないのだけれども」

「一応言っておくけど俺は見た目だけで決めたくないからな」

「ふふ。わかっているわ。私も見た目だけで決めたくないもの。だから、このまま校門を潜るのも気にしないわ」

「むしろ牽制になる、だろ？」

「ええ」

「じゃ、行くか」

「ええ、行きましよう」

雪乃にしがみつかれたまま、校門へと歩き出す。校門に近づいたと

ところで『ヒキタニくんマジすげーわ』とか『ゆきのん大胆!』とか『雪ノ下さん、ヒキオと腕で組んで幸せそうだからいいっしょ』とか聞き覚えのある声が聞こえてきたけど気にしないでおいた。

「八幡、雪ノ下さん」

「お、おお?どうした、戸塚」

「ふたりとも凄い目立ってるけど、見せつけてるってことでいいのかな?」

「まあな。お互いに好き合ってるし、むしろこれから雪乃の家に婚約のお願いをしに行くまでもある」

「わあ、凄いや八幡。雪ノ下さんも、おめでとう」

「ありがとう、戸塚くん」

そう言っただけで微笑む雪乃の笑顔に、俺も自然と笑みを浮かべながら見惚れるのであった。

了

ぼーなすとらつく!

B・T・1 それぞれの誕生日

8月8日。夏休み真っ只中のこの日は、俺の誕生日である。

誕生日ぐらい惰眠を貪らせてほしいんだが、今日ばかりはそうも言っていないことぐらい出不精の俺にもよくわかっていたので、通学時間とそんなに変わらない朝早い時間から外出した。

順調に社畜化が進んでいる気がしないでもない。まだ学生なんですけどね。

着慣れない洋服に身を包み、姿見が鎮座する六畳ほどの部屋の中で、マツ缶を飲みながら鏡に映る自分の姿を眺めてから大きなため息を一つつく。

マツ缶を机の上に置くのとその部屋の扉がノックされるのはほぼ同時だった。

「どうぞ」

「けぷこんけぷこん。我参上」

「帰れ」

「いきなり酷くない?」

「材木座、お前を呼んだ覚え無いんだけど」

「げふう。我は戸塚氏に誘われたのだ」

戸塚が呼んだのか。ならしょうがないな。

「で、戸塚は?」

「こんにちは八幡。わわつ、凄く似合ってるよそれ」

「マジで?俺的には似合わな過ぎて、すぐにでも制服に着替えたいと思っっているんだが」

戸塚とお揃いだしな。

「もう、今日の主役が何を言ってるの。あ、そうそう、誕生日おめでとう。これ、誕生日プレゼント」

そう言っって戸塚は小さな包みを俺に手渡してきた。戸塚マジ天使。

「サンキューな、戸塚」

「わ、我からも」

戸塚に追従して材木座が細長い包みを差し出してくる。まさか材木座から誕生日プレゼントを貰う日が来るとは思わなかった。

「おお、サンキューな。材木座」

「戸塚氏と被らないように一緒に買いに行ったから、共に使つてくれると嬉しいぞ」

「うん、そうだね。ちなみに僕からはネクタイピン」

「我からはネクタイを贈らせてもらうこととした」

社畜頑張れつてことですね。わかります。

「では後ほど、お主の雄姿しかと見届けさせてもらう」

「また後でね。八幡」

「おう」

戸塚たちを見送ってから二人から貰った包みを机の上に並べて置く。ある意味社会人の象徴とも言えるものだ。

「つたく、気が早いな」

まあ、でも悪くはないな。

× × ×

礼拝堂の中央で雪乃が連れられてくるのを待つこと暫し。

両開きの大きな扉が静かに開かれ、純白のドレスに身を包み、ヴェールを被った雪乃がお義父さんに連れられて俺の方へと近づいてきた。

「……綺麗だ」

「ありがとう。貴方も格好いいわ」

お互いを真正面において見つめ合いながら言葉を交わす。

「雪乃、八幡くん。仲睦まじいのは結構だが、ここは私の顔を立ててはくれないかね？」

「すみませんお義父さん」

「ごめんなさい、父さん」

「謝るタイミングまで一緒とはさすがだね。では八幡くん。これからも雪乃のことを頼んだよ」

「はい。一生幸せにします」

「八幡。嬉しいわ」

そう言うのと雪乃は自然にお義父さんの腕を離して俺の腕にしがみ付いてきた。

パイプオルガンの荘厳な調べが礼拝堂に響き始めるのと同時に、祭壇に向かいゆっくりと歩いていく。

参列者はお互いの家族と数人の友人、恩師だけというささやかなものだが、俺も雪乃も人付き合いが得意というわけではないのでむしろ落ち着くつてもものだ。

牧師の前に辿り着き、音楽が消えるのを静かに待つ。

「汝、比企谷八幡は、この女、比企谷雪乃を妻とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

牧師が雪乃のことを比企谷雪乃と呼んだのは、結婚式を行う前に役所に婚姻届を出してきてあるからである。

「はい、誓います」

「汝、比企谷雪乃は、この男、比企谷八幡を夫とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「はい、誓います」

「皆さん、お二人の上に神の祝福を願い、結婚の絆によって結ばれたこのお二人を神が慈しみ深く守り、助けてくださるよう祈りましょう。宇宙万物の造り主である父よ、あなたはご自分にかたどつて人を造り、夫婦の愛を祝福してくださいました。今日結婚の誓いをかわした二人の上に、満ちあふれる祝福を注いでください。二人が愛に生き、健全な家庭を造りますように。喜びにつけ悲しみにつけ信頼と感謝を忘れず、あなたに支えられて仕事に励み、困難にあつては慰めを見いだすことができますように。また多くの友に恵まれ、結婚がもたらす恵みによって成長し、実り豊かな生活を送ることができますように。アーメン」

俺も雪乃もキリスト教徒ではないので、祈りの言葉は口にしなかった。その代わりお互いの手袋を取り外して―雪乃のは長手袋だったので少しだけ手間取ったが―タキシードのポケットに捻じ込んで指輪が差し出されるのを待つ。

やがて牧師から差し出された指輪を取り、雪乃の左手薬指に嵌めると、雪乃が指輪を取り、俺の左手薬指に嵌めてくれる。

それから俺は雪乃のヴェールを後ろに払いあげ、小さく微笑みあつてから雪乃の両肩に手を置いて、目を閉じて唇を交わした。

先ほどから一言も言葉を発するものがないのは、俺たちがそう望んだからだ。指輪の交換だの、誓いの接吻だの、いちいち実況されたくはない。

小町や陽乃さんがビデオカメラで撮っているのは、この際仕方のないことだと気にしないことにした。

俺たちが誓いの接吻を済ませて扉側に身体を向けると、再びパイプオルガンの荘厳な調べが礼拝堂に響き渡る。

それぞれの両親や小町、陽乃さん、平塚先生、戸塚、由比ヶ浜、材木座、城廻先輩、一色、川崎、三浦、海老名さんなんか、赤絨毯の上を歩く俺たちに祝福の言葉をかけてくる。

川崎や三浦、海老名さんが来てくれたのは意外だったな。材木座はまあ、戸塚が呼んだから仕方ないね。

俺たちが大扉から外に出ると、それに合わせてウエディングベルが響いた。このまま暫くの間はここで待機して、チャペルの前で記念撮影を行う手はずになっている。

「これからもよろしくな」

「こちらこそ。これからもよろしくね。旦那様」

その呼び方は反則だ。クラっときたぞ。

「八幡の誕生日に学籍したから、比企谷雪乃の誕生日も8月8日ということになるのだけけど」

「いや、普通に結婚記念日で良くない?」

「貴方とお揃いというのがいいのよ」

「そっか。まあいいんじゃないの?」

「ええ」

嬉しそうに微笑む雪乃に見惚れながら、俺も自然と微笑みを浮かべていた。

「よろしくな。奥様」

B. T. 2 雪ノ下雪乃は愛を知る①

「お帰りなさいませ、雪乃お嬢様。いらつしやいませ、比企谷様」

「ただいま。私たちは応接間に行けば良いかしら？」

「はい、そのように承っております」

玄関で靴を脱いでいると、どこからともなく家政婦らしき人が現れて雪乃に声をかけてきた。

そのやり取りを聞いているだけで、雪乃がお嬢様だということを否応なく認識させられた。

「わかりました。行きましょう、八幡」

「お、おう」

雪乃に手を引かれて廊下を進み、比企谷家のリビングの倍はありそうな部屋に連れ込まれて応接セットのソファアーに座らされた。

雪乃はさも当然のように俺の横に座り、俺の肩に寄りかかってくる。

「なあ雪乃、これからお義母さんが来るのに、寄りかかっているのはヤバいと思うのだが」

「大丈夫よ。家族公認と言ったでしょう」

「いや、それでもだな…」

とりあえず寄りかかるのは止めた方がいいと言おうとしたとき、扉が開かれ、和服姿の女性が入ってきて俺たちの前のソファアーへと腰を下ろした。

「いらつしやいませ、比企谷八幡さん。お帰りなさい、雪乃」

「ただいま母さん」

「…お邪魔しています」

「こうして言葉を交わすのは初めてですね。雪乃の母の雪ノ下陽菜はるなです」

穏やかだが、有無を言わせぬ迫力を感じさせる声だった。

だから、雰囲気飲まれる前に俺はあらかじめ考えてきた口上を口にする。

「比企谷八幡です。本日は私と雪乃さんとの婚約を認めていただきたく

めに参りました」

「比企谷さん、貴方、勘違いしていますわよ」

「は、はあ?」

「婚約とは当事者同士、この場合は比企谷八幡さんと雪乃との合意で成立するものなの」

「いえ、俺たちまだ未成年ですから」

「そうですね。では、比企谷さんのご両親はお認めになっているのかしら?」

そうくるか。

なので、俺はあらかじめ用意してあったものを制服の内ポケットから取り出し、雪ノ下母の前へ置く。

「あら。用意周到かと思いましたが、残念ね。これでは足りないわよ」

俺の名前と両親の名前が記入されている婚姻届を一瞥して、雪ノ下母は薄い笑みを浮かべてそう言うと、婚姻届をこちらに向けて雪乃の前へと差し出した。

「雪乃の名前が書いていないのはどういうこと?」

「あっ!」

雪ノ下母に指摘されて俺は思わず声を上げた。俺の家族しか記入していないのは昨日の夜に婚姻届を書いてもらったからである。当然のことながら雪乃は知らない。

やばい、雪乃に名前書いてもらうのをすっかり忘れていた。

ドヤ顔で雪ノ下母に差し出しちやったし。俺の馬鹿、ボケナス、八幡!

「八幡、どういうことかしら?」

「いや、もちろん相手が雪乃だつてことは両親も知ってるぞ。書いてもらおうと思つて忘れてた。すまん!」

「貴方のご両親に認めてもらったのは嬉しいのだけれど、そんな大事なことを忘れるなんて酷いわ」

「本当に悪かった。それでだな、お義母さんに認めてもらうためにも、今ここで書いてもらつてもいいか?」

「書くものはあるのかしら?」

「ああ、ほら」

内ポケットからボールペンを取り出して雪乃に渡す。

雪乃はボールペンを受け取ると流麗な文字で婚姻届に自分の名前を記入して、顔を上げて母親に向き直った。

「母さん。私は彼と、比企谷八幡と婚約したいです」

「雪乃。それは本当に貴女の本心ですか?」

「はい。八幡は私を、雪ノ下雪乃を認めて、受け入れてくれました。それに私も比企谷八幡個人を認めて、受け入れたいです」

真っ直ぐに母親を見据えてはつきりとそう宣言する雪乃。

俺がその横顔に見惚れていると、雪ノ下母は暫くの間、無言で俺たちの方を見ていた。

「雪乃」

「はい」

「貴女にとって、比企谷八幡さんはどのような人になるのかしら?」

雪乃は俺の手を握ると小さく微笑んで、はつきりと言った。

「伴侶です」

その言葉を聞いた瞬間、俺は雪乃に抱き着いていた。

「八幡、苦しいわ」

「……………ありがとう」

「どういたしまして」

雪乃は俺の耳元でそう囁くと、そっと抱き締め返してくる。

「ふふ。本当に信頼し合っているわね」

「ええ。信頼し合っているわ」

「少し場を弁えた方がいいと思いますけれど、今回は不問にします。とりあえず、ふたりとも離れなさい」

雪ノ下母に言われてお互いの戒めを解いてから相手に向き直った。隣り合った手は繋いだままにしているが、そのくらいは勘弁してもらいたい。

「比企谷さん、貴方、雪ノ下を名乗ることになっても大丈夫かしら?」
「雪乃さんと一緒になれるのであればそれでも構いません。うちは一

般家庭ですから苗字に拘りはありませんし」

そこその由来はある比企谷姓ではあるが、まあ親戚の誰かが継いでいくだろうから俺的には問題ない。

「雪乃も構わないのかしら?」

「八幡と一緒にされる最善手がそれだったら仕方がないけれど、私は、その、できれば比企谷雪乃になりたいと思っっているわ。その方がお嫁さんって実感できるから……」

「ふふ。雪乃は嫁ぎたいのね」

「ええ」

「比企谷さん、進路は決まっていraftしやるの?」

「その、雪乃さんと同じ大学へ行きたいと考えています」

「そうですか。そうすると5年以上は結婚する気が無いということになりますね」

目を細めて雪ノ下母が俺を見据える。

「親の庇護下にいる間は、結婚するわけにはいきませんよね?」

「親の庇護下でも結婚する者はおりますよ? 政略結婚はその最たるものですね」

「……意に沿わない結婚を強いる気ですか?」

真つ直ぐにこちらを見ている雪ノ下母を睨む。

雪乃は不安になったのか、俺の手を握る力が強くなった。

「そうね、雪乃には意に沿う形の政略結婚をしてもらおうかしら」

「私は、八幡以外とは嫌よ!」

「待て雪乃。お義母さん、今、意に沿う形の政略結婚って言いましたか?」

「ええ、言いました」

「それはいったい?」

「つまり、比企谷八幡さんに雪乃を嫁がせます。その代わり比企谷さん、いえ、八幡さんと呼ばせていただくわね。八幡さんは雪ノ下建設の経営に携わる資格取得を目的とした学科のある大学へと進学していただきます。この条件でよろしければ、私たちの庇護下でも結婚が可能になりますよ」

そう言うと、雪ノ下母は優しく微笑んだ。

B. T. 2 雪ノ下雪乃は愛を知る②

「母さん……。私、比企谷家に嫁いでもいいの?」

「雪乃を嫁がせる代わりに、八幡さんは雪ノ下建設のために学び、働いてもらいます。わかりやすく言えば、八幡さんには雪乃の代わりにゆくゆくは雪ノ下建設を継いでもらいます」

「俺が、雪ノ下建設を……」

「出来ないとは言わせませんよ。おそろく雪乃も八幡さんも然るべきところから婿を取って雪ノ下建設を継がせるのが雪ノ下家のやり方だと思っていたのでしよう?」

「ええ、まあ」

「でもそれだと、八幡さんも雪乃も今ここには居ないはずですよ。それにもしそうなら、一人暮らしなんて許しません」

「だから母さんは私の一人暮らしに最後まで反対していたのではないのかしら?」

俯いたまま雪乃がそう呟くと、雪ノ下母「いや、お義母さんと呼ばせてもらおう。俺も八幡さんって呼ばれているし――は、眉を顰めて雪乃に視線を向ける。

「貴女の一人暮らしに反対したのは心配だったからよ。体力は無いし、朝も弱かったでしょう」

「小学校の時のことを言われても困るのだけれど」

「留学から戻ってきてすぐにマンションに行ってしまったから、中学生の時の雪乃のことはよくわからないのよ。朝が弱いのは克服できたようだけれど」

「ええ。ステイ先が早起きだったから、自然と起きられるようになったわ」

「ふふ。キヤスには改めてお礼を言っておかないといけないわね」

「え?母さん。キヤサリンさんと知り合いだったの?」

「キヤスは大学の同級生よ。そもそも見ず知らずの人に娘を任せるわけないでしょう」

「私はアビーさんが父さんの知り合いだと思っていたのだけれど」

「男親が娘を知り合いの男に預けるなんてことはしないわよ。少し考えればわかることだと思っただけ、まああの時の雪乃は余裕なかったし、私や陽乃のこと避けていたものね」

少し寂しそうに言うと、お義母さんは静かに雪乃に視線を合わせた。

「雪乃。この際だからはっきり言いますが、私も夫も、陽乃も家族として貴女のことを愛しています」

いや、ぶっちゃけすぎだろそれ。雪乃なんて鳩が豆鉄砲食らったような顔して固まってるし。

「私は貴女の負担にならないよう、甘やかすところは夫に任せて、貴女のごことは都築や陽乃に見守らせていました。陽乃が貴女を構い過ぎて距離を置かれるようになったとき、陽乃は私のところで『雪乃ちゃんに嫌われた』なんて落ち込んでいましたし」

「それでも何事もなかったかのように絡んでくる姉さんは疎ましいのだけだ」

「そのたびに私に泣きついてくる陽乃を想像してごらん下さい。少しは見方が変わるのじゃないかしら？」

「母さんに泣きつくならもう少し穏やかなアプローチをしてくれればいいと思うのだけだ」

「気丈に振舞う雪乃を見るとつい構いたくなってしまうそうよ。そこが陽乃の悪いところなのでしょうね」

「…そう」

小さくそう呟く雪乃の頬はほんのりと赤く染まっていた。うん。まあなんだかんだで懂れていた姉が自分を溺愛していたと母親から聞かされれば赤面したくもなるよね。

「私は反対に必要最低限のことしか伝えなかったし、事務的な対応しかしなかったわね。それを雪乃は上からの押さえつけと判断し、私もそれを訂正しなかった。甘やかすところは夫に任せていたから、まさか貴女の中で雪ノ下家では私が実権を握っていて夫は傀儡で婿養子などというイメージになっていたのには驚きを通り越して悲しくなりましたよ」

「そのイメージは姉さんと話し合った結果、辿り着いたものなのだけ
れど」

「陽乃までそんなことを…。雪ノ下家は間違いなくお父さんの家です
し、私の実家は二階堂家です。まあ家族皆、他界しているので二階堂
家はもうありませんけど。残っているのは私の振袖の家紋くらいか
しらね」

「ごめんなさい」

「貴女が気にすることはないわ。雪ノ下家は間違いなくお父さんの家
だということ覚えておいて頂戴。それと、雪乃を八幡さんに任せる
という判断もお父さんと相談して決めたことですから」

「……あの、なんでそんなに俺のことを買ってくれているのでしょう
か？」

お義母さんの言葉に俺は思わず尋ねてしまう。義姉さんや彼女の
報告から判断したお義母さんならともかく、お義父さんまでが俺のこ
とを買ってくれている理由を知りたかった。

「陽乃から『雪乃ちゃんに恋人ができたよ』という報告を貰ったその日
のうちに夫とはある程度の話はできていましたけれど、最終的には雪
乃が貴方のことを伴侶とまで言い切るほどに信頼しているのを見せ
られたからかしらね」

『いやー、まさか雪乃ちゃんがあんなにはつきりと言い切るとは思わ
なかったよ』

いきなりこの部屋には居ない人の声が聞こえてきて、俺も雪乃もビ
クツと体を震わせる。

いきなりの乱入は心臓に悪い。勘弁してください。義姉さん。

「ね、姉さん？」

『実は隣の部屋に居て初めから聞いていました。あと、お父さんも一
緒だよ雪乃ちゃん、義弟くん。じゃ、今から行くからね』

義姉さんだけでなくお義父さんも居るとは。

俺が小さく溜息をついてからお義母さんに視線を向けると小さな
微笑みを返してきた。

あ、これ、初めから仕組んでたのね。

雪乃の手を握り、雪乃と視線を交わしながら、俺たちはお義父さんと義姉さんの襲来を待つのであった。

B. T. 2 雪ノ下雪乃は愛を知る③

× × ×

暫くしてから部屋の扉が開かれ、満面の笑みを浮かべた義姉さんと、テレビでしか見たことのないお義父さんが連れ立って部屋に入ってきて来る。

そのままお義母さんの隣にお義父さんが座り、お義父さんの横に義姉さんが座った。

「初めまして。雪乃と陽乃の父親の雪ノ下利晃としあきです」

「は、はい。初めまして。比企谷八幡です」

「悪いね。隣室で少しの間モニターさせてもらったよ」

お義父さんはそう言うとおもむろに頭を下げた。

「雪乃を、よろしく頼むよ」

「えっ、はっ、えええ？」

突然の出来事に俺は奇声を上げて狼狽える。

いや、だって、初対面の雪乃の父親、県議会議員の雪ノ下利晃が会って早々に頭を下げてくるんだよ。慌てるなって言う方が無理だよね？

「…そこは男らしく返して欲しかったのだけれど」

「いや、ほら、拍子抜けしたっていうかなんて言うか…」

「言い訳はいいから、父さんにきちんと返事をしなさい」

「お、おう」

雪乃に尻を叩かれて、俺はお義父さんに真っ直ぐに向かい合う。

ところで、なんて返事すればいいんだ？

雪乃さんをください。——いや違う。

雪乃さんとの婚約を認めてください。——これも違う。

だとすれば、あれしかないな。

「雪乃さんと幸せになります」

俺がそう返事をする、雪ノ下家の面々—雪乃も含めて—は一様に呆気にとられたかのような表情を浮かべた。

……あれ？何か間違えたか？

「……嬉しい」

雪乃がそう呟いたかと思うと横から俺に抱き着いてきた。

「ちよ、ちよっと、皆の前だぞ!」

「構わないわ」

なんで猫みたいに擦り寄ってくるの? ゆきにゃんなの?

「まあ、あんなこと言われちゃ無理ないか」

「臆面もなく言い切りましたしね」

「嬉しいのはわかるが、雪乃は一旦離れなさい。話が進まないだろう」

義姉さんとお義母さんに白い目で見られているところに、お義父さんが仕切りなおすために雪乃に声をかけると、雪乃は不承不承といった感じで俺から身体を離れた。

「さて八幡くん。君は雪乃を娶るということで間違いないのだね?」

「はい」

「妻も言ったが、君と雪乃の結婚は政略結婚とする。それに伴って八幡くんと雪乃は今日から許嫁ということになるが構わないかね?」

「はい。構いません」

「八幡くんが18になる日に結婚してもらおう」

「わかり………えっ!? 誕生日に!」

「政略結婚とはそういうものだよ。八幡くん」

「はあ。わかりました」

反抗するだけ無駄のようなので素直に従うことにした。俺の誕生日が結婚記念日になるのか。まあわかりやすいからいいけど。

「ふふ。8月8日には比企谷雪乃に……」ニヤニヤ

「雪乃ちゃんがだらしのない顔になってる!」

「また、陽乃はそうやってすぐ雪乃をからかうから疎まれるのよ」

雪乃を見て義姉さんがからかうのをお義母さんが窘めている。ホント、懲りないですね、義姉さん。

「雪乃。結婚した時点で戸籍上は比企谷になるが、高校卒業まで学内では雪ノ下を名乗りなさい」

「そうね。在学中に名前が変わると色々問題がありそうだもの。わかりました。ところで父さん、その、お互いの親しい友人などを結婚式

に呼んでも良いのかしら?」

「式は身内だけで内々に行おうと思っっているのだが、数名ならゲストを呼んでも構わないよ。八幡くんの誕生日はさつき言っていた8月8日なのかね?」

「ええ。そうよね?八幡」

「ええ。8月8日が俺の誕生日です」

さらつと友人などを呼んでいいか聞けるのは凄い。さすが雪乃。平塚先生と由比ヶ浜は確定として、後は誰を呼ぶのかねえ。

俺サイドは小町と戸塚が一押しだけ。後は被るけど平塚先生と由比ヶ浜だな。材木座?暑苦しいから却下。

「ふむ、約5か月後か。式の方は問題ないな」

お義父さんはそう呟くと、隣に座っているお義母さんに何やら耳打ちをする。するとお義母さんが頷いて部屋を出て行った。

「母さんにはあるものを持って来てもらうように頼んだ。すぐに戻ってくるよ」

「何を取りに行ったのかしら?」

「雪乃に關係するものだよ。結納代わりに八幡くんに預けたいものがあるんだ」

「後日改めて両親と共に出直して来た時に預かるのでは駄目ですか?」

「記載済みの婚姻届をご両親から預かっている時点で、八幡くんが比企谷家の総意だと思っただが」

「…まあ、そうですね」

うん、確かに婚姻届に署名してもらった時に親父から同じようなことを言われたよ。

未成年の俺なんか預かって大丈夫なものなの?それ。

「んふふ。義弟くん、何を考えているのかな?」

「大したことじゃありませんよ。俺が預かってもいいものなのか心配になっただけです」

「大丈夫だと思うよ。母さんが取りに行ったのって雪乃ちゃんのアルバムとか振袖とかだから」

「アルバムは興味ありますけど、振袖は俺が預かる意味ないと思うんですけど」

「八幡くん、嫁入り道具ってやつだよ」

「そ、そうですか…」

「それにこれは八幡くんを手に入れるための結婚であり、雪乃が幸せになる結婚でもあるのだから気にしないでくれると嬉しい」

「なんでそんなに俺の好感度高いの？ 過大評価されてるの？」

「まあ雪乃は幸せにしますけどね。」

B. T. 2 雪ノ下雪乃は愛を知る④

決意を新たにしていると、お義母さんが筆筒の引き出しくらいの大
きさの桐箱を持って部屋に入ってきた。

机の上に桐箱を置いて蓋を開けると、中には薄紅色の色鮮やかな振
袖とアルバム、大きめの封筒が入っているのが見えた。

「雪乃、こちらへいらっしやい」

お義母さんが机の端に立ったまま雪乃を呼び、雪乃がそれに応えて
席を立ちお義母さんの前へと歩いていく。

「こうして抱き締めるのは留学前以来かしら？大きくなったわね」

「か、母さん」

お義母さんが雪乃を抱きしめると、雪乃は身体を身体を強張らせた
が、やがて両手をお義母さんの背に回してそっと抱き着いた。

「先ほども言いましたけれど、私たちは貴女を愛しています。何があ
ろうと、貴女は私たちの娘です。そのことを忘れないで」

「……はい」

「たまにはこうしてスキンシップを取るのも悪くないでしょう？」

「誰かに見られているのはちよっと恥ずかしいのだけれど」

「その誰かが家族なら問題ないでしょう？」

「…そうね」

「ふふ。ではまた近いうちに」

「……うん」

名残惜しそうに雪乃はお義母さんから離れて俺の隣に戻ってくる
と、お義母さんは桐箱の中にあつた封筒を取り出して中身を確認し、
中から賞状のような書類と小さな手帳のようなものを取り出して、自
分の膝の上に置いた。

「雪乃。これは貴女が生まれる前に作った母子手帳です」

そう言つて差し出された母子手帳を受け取つた雪乃の目が大きく
見開かれる。

「母さん。その、これは本当に私の？」

「ええ、そうよ」

「母さんの名前じゃないのだけれど」

「鶴岡雪菜ゆきなと書いてあるはずよ」

「母さんは雪ノ下陽菜でしょう」

「ええ。私は雪ノ下陽菜で間違いないわ。そこに書かれている鶴岡雪菜は旧姓だと二階堂雪菜。私の妹よ」

「……………どういこと？」

雪乃が掠れる声で尋ねると、お義父さんが話し始める。

「…17年前の1月3日、鶴岡夫妻の乗った乗用車が病院へ向かう途中、信号無視のトラックに側面から衝突されて、旦那さんは即死、奥さんは病院に運ばれたが意識不明の重体。鶴岡夫妻には両親がおらず、家族と呼べる者は奥さんのお姉さんしか居なかったが、緊急連絡先がお姉さんになっていたため、お姉さんが病院へ駆けつけ、医師の話聞き奥さんの状態を確認して帝王切開の同意書に署名した。そして無事女の子は生まれたが、奥さんは息を引き取った」

お義母さんも雪乃も泣いていた。お義母さんはお義父さんが、雪乃は俺が寄り添って落ち着くのを待つ。義姉さんは珍しくオロオロしていた。まあわからなくもない。

「…………私は離婚してでも雪乃を引き取ろうと思っていたの。そうしたらお父さんが『馬鹿なことを言うな、僕たちの娘として育てよう。妹が出来て陽乃も喜ぶ』って」

「戸籍上は実子になっているのだけれど」

「特別養子縁組よ。雪菜と私は血縁だし事情が事情だから特に問題なく手続き出来たわ。だから雪乃は間違いなく私たちの娘であり、雪菜と俊樹としきさんの娘でもあるの。ただそれだけよ」

「母さん…」

「雪乃のマンションは鶴岡家のもので、雪乃が継いだものでもあるのよ。だから貴女が高校生になって一人暮らしをしたいと言いついた時、一人暮らしをすることを認めたの。あのマンションは貴女の物なのだから」

そう言つて封筒から取り出したのはマンションの権利書だった。世帯主の欄には雪ノ下雪乃の名前が記されている。

「雪乃ちゃんが一人暮らし出来たのはそういうわけだったんだ。依怙
鬚肩じゃなかったんだね」

「そうよ。雪乃には持ち家があったから一人暮らしを許したのよ。決
して依怙鬚肩ではないわ。陽乃の一人暮らしを反対しているのはね、
貴女が心配だからよ」

「私もう成人してるんだけどなあ」

「暇さえあれば雪乃のことや大学のことで泣きついてくる娘に一人暮
らしなんてさせられないわ。危なっかしくて」

「ちよつと、雪乃ちゃんや比企谷くんの前で言わないで！」

「陽乃。手遅れですよ」

「お母さんの馬鹿あ」

あれ？義姉さんが普通の女の子しているぞ。

「なあ雪乃、もしかして義姉さんってママっ子なの？」

「そのようね。今までそのような素振りを見せたことなかったのだけ
れど、もしかして自分が母さんに甘えるために、私にちよつかいを出
していたのかしら？」

「いや、お前にちよつかいを出していたのは純粹に可愛がるためだと
思うぞ。お義母さんの話を聞いて確信はしたけど、義姉さん、俺に勝る
にも劣らないシスコンだし」

「自分がシスコンなのは認めるのね。シスコン八幡くん」

「ついに一文字も元の字が無くなったか。でもそれでいいの？お前も
シスコン雪乃になるぞ？」

「あら。8月8日までは雪ノ下ですもの。関係ないわ」

「へいへい。俺が悪かったよ」

お互いに軽口をたたき合い、最後には笑みを交わしてみたりなんか
して。

「雪乃。その、気をしっかり持つてね」

「私は母さんたちの娘なんでしょう？その、衝撃的な話だったし、驚い
てはいるのだけれど、父さんも母さんも姉さんも私のことを愛してく
れているって教えてもらったし、実感したから、母さんが言ったよう
に親が2組いると思えばいいことだと思うの。それよりも、姉さんが

ママっ子だったことの方が衝撃的なのだけど」

「さつきから雪乃ちゃん酷い！」

「強く、なったわね」

「母さんが甘えさせてくれるってわかったから。八幡が側にいてくれるから私は強くなれるの。それに、雪菜母さんと俊樹父さんも見守ってくれると思うの」

「……そうね」

「近々、雪菜母さんと俊樹父さんのお墓参りに連れて行ってくれるかしら？」

「ええ。行きましょう。八幡さんも一緒に」

「そうですね。報告しないと」

「報告といたしますと？」

「わかるでしょう？雪乃と幸せになりますって報告をお義父さんとお義母さんにするんですよ」

「それ報告じゃなくて惚気だよ義弟くん」

「じゃあ雪乃さんを娶りますとでも言えばいいですかね？義姉さん」

「あー、うん。そうだね。比企谷くん、その、ずいぶんと余裕を持ってみたいけど、どうしてかな？」

義姉さんがそんなことを聞いてくるので、雪乃に目配せをして返事をする。

「シスコンでママっ子の義姉さんなら怖くないですもの。なあ、雪乃」

「そうね。ママっ子の姉さんは好感が持てるわね。シスコンなのはどうかと思うのだけれど」

「ふたりして虐めるっ！」

「自業自得よ、陽乃」

「お母さんまで!?!」

こうして義姉さんを弄りながら、鶴岡家のことをお義母さんが言っただよりに軽く受け止めることとした。

お義母さんも義姉さんもそんな雪乃の意図に気付き、乗ってくれた。

「まあ、そういうわけで、実際は八幡くんではなく、雪乃に渡したい

ものというか返したいものだったんだけど、受け取ってもらえるかな？」

「責任持って雪乃のマンションまで運ばせていただきます」

「振袖は雪菜のものだから、二階堂の家紋が入っています。大事になさい」

「はい」

「雪乃。お前の家だ。好きにしなさい」

「父さん。ありがとう」

雪乃は爽やかな笑顔を浮かべてそう言うと、俺の顔を覗き込んで口元を緩めた。

「それじゃあ、婚約も成立したことだし一緒に暮らしましょう。八幡」

B・T・2 雪ノ下雪乃は愛を知る⑤

お前は何を言っているんだ。

「いや、あのな。婚約が成立したからっていきなり同棲するのはちよつと…」

「ちゃんと八幡の部屋を用意するわよ。寝るのは別の部屋なら大丈夫でしょう?」

そう言ってから雪乃は俺の耳に顔を寄せて俺にしか聞こえない声で囁く。

「…準備が出来たら一緒に寝ましようね」

「ばっ、馬鹿」

顔が熱い。確実に俺の顔は真っ赤になってることだろう。

「ふふ。貴方のせいよ」

なんでそんなに楽しそうなの?」

「雪乃が世帯主だから好きにしなさいとは言ったけど、まさか雪乃の方からその日のうちに同棲を申し込むとは」

「それだけ八幡さんのことを信頼しているのよ」

「あの雪乃ちゃんが伴侶って言いきつちやうくらいだしね」

「陽乃、貴女はどう思ってるの?」

「雪乃ちゃんのこと? 雪乃ちゃんが私の妹ってことに変わりはないでしょ? 雪乃ちゃんが一人暮らしを許されている理由もわかったし、なんの問題ないよ」

「雪ノ下建設を比企谷くん継がせることについてはどのように考えているかしら」

「私が政治家になるって決めた時点で、会社は雪乃ちゃんが継ぐって決まっていたでしょ? でもその雪乃ちゃんの負担を肩代わりしてくれる比企谷くんが雪乃ちゃんの隣に来てくれて良かったなって思ってるよ」

お義母さんと義姉さんの話を聞いて、思わず質問をしてしまう。

「義姉さん、政治家になるんですか?」

「お父さんの後を継ごうと思って大学の専攻を政経にしたからね。だ

から雪乃ちゃんが会社を継ぐのって3年前には決まっていたんだよ」
「八幡が私の代わりに会社を継いでくれるから、私が八幡の夢を継いで専業主婦になるわ」

「じゃあ、雪乃は大学行かないのか？」

「そうね。高校卒業後は家に居て、子供を育てるというのもいいかもしれないわね。そうするとクリスマスくらいから子作り解禁かしら？3か月くらいならお腹も目立たないし…」

「何さらつと凄いいこと言ってるの!？」

「雪乃。孫の養育費は任せなさい」

「お義母さんまで!？」

「雪乃ちゃん、妊娠初期は体調が崩れやすくなるからさ、春になるまで子作りは止めといた方がいいと思うな。それまでは避妊薬を飲んでおけば、周期にもよるけれど来月あたりからいっぱい可愛がってもらえるよ」

「姉さん。そうね、私の方が準備すれば八幡の準備を待たなくてもいいから、それが一番いかもしれないわね」

何を勧めてるの!？義姉さん！

「若いっていいわね。快樂に溺れないようにするのよ」

何言ってるの!？お義母さん!？

「あれ？義弟くんは乗り気じゃないの？」

「そんなことないはずよ。この間、避妊具がないから泊まれないと言って帰っていったもの」

「ふむ。責任感があつていいことだ」

いや、そこは怒るところじゃないの？お義父さん。

「流石にいきなり引越すというわけにはいかないだろう。今日のところは家に帰って荷造りをしてもらって、明日引越すという事で良いのじゃないかな？車も雪ノ下家から出すよ。梱包資材はすぐに手配しよう。八幡くんが家に着くころには届いているはずだ」

「いきなり引越せと言われても困りますよ」

「八幡くん。政略結婚とはそういうものだ」

「そう言えば何でも通ると思ってるんじゃないでしょうね？」

「逃がさないよ。八幡くん。雪乃のためにも雪ノ下のためにもね」

「父さん、ありがとう」

「そこお礼言うところじゃないからね!？」

雪乃に突っ込みを入れると、雪乃は潤んだ瞳で真っ直ぐに俺を見つめてきた。

「駄目、なの?」

「いや、駄目ってわけじゃないんだけどよ…」

「私は一日でも早く八幡と一緒に暮らしたいのだけれど」

「冷静に考えてみるよ。俺たち恋人になつてまだ三日目だぞ?それです嫁になつて8月8日に結婚することが決まった。これだけでもかなり凄いことだと思ふのだが、そこに明日から同棲開始なんてもんが追加されるんだぞ?ヤバくねえか?」

「むしろ楽しみなのだけれど。八幡は、その、嫌なの?」

「嫌じゃない。けど、変化が急すぎてさ、気持ちの整理が出来ないというかなんというか」

「名前呼びみたいになれてしまえばいいのよ。私はもう、八幡が隣に居るのが当たり前に感じて居るのだけれど」

「…狡いな。そんなこと言われると断れねえだろ。俺だって、雪乃が隣に居るのが当たり前だつて感じたいし」

「ふふっ。八幡」

俺が小さく呟いたのを聞かれたらしい。嬉しそうに俺に抱き着いてきた。

お義父さんとお義母さんと義姉さんに視線を向け、返された視線を受けて溜息を付く。

うん。知つてた。貴方たち雪乃のこと大好きだもんね。

その生温かい眼差しを俺にも向けなくてくれますかね。恥ずかしいから。

——こうして、雪乃との婚約(ついでに結婚の日時も)が決まった俺は、その翌日から両家の家族公認で同棲する運びとなつたのでありました。まる。